

# 筑後北部第二地区遺跡群

低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集

1995

筑後市教育委員会

ちく　ご　ほく　ぶ　だい　に　ち　く　い　せき　ぐん

# 筑後北部第二地区遺跡群

低コスト化水田農業大区画整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

筑後市教育委員会

## 序

筑後北部第二地区遺跡群の発掘調査は、低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業に係る県営ほ場整備事業北部第二地区の工事に伴い、平成6年度に福岡県筑後川水系農地開発事務所の委託を受けて、筑後市教育委員会が実施したものです。

この度報告致します遺跡は、若菜立薪遺跡、若菜田中前遺跡、若菜湖ノ江遺跡で、主として弥生時代から中世の集落跡やその周辺部が確認されました。

本報告書が、地域の歴史研究や文化財の保護、啓発の一助として広く活用していただければ幸いであります。

調査に際しましては、福岡県筑後川水系農地開発事務所および筑後北部第二土地改良区をはじめ、調査に参加されました作業員に多大なご協力を頂き、厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成7年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 森田 基之

## 例　　言

1. 本書は、低コスト化水田農業大区画は場整備事業に係る県営ほ場整備事業北部第二地区的工事に伴い、福岡県筑後川水系農地開発事務所の委託を受けて、筑後市教育委員会が平成6年度に実施した筑後北部第二地区遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査に係る費用は、国および県から補助を受け、残る費用の80%を福岡県筑後川水系農地開発事務所が負担した。更に地元負担分の20%を筑後市で負担した。
3. 検出遺構の実測および写真撮影は小林勇作・大島真一郎、出土遺物の実測は平塚あけみ、写真撮影は柴田剛（財団法人君津都市文化財センター）・小林が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
4. 若菜湖ノ江遺跡では、検出遺構の空中写真撮影を衛空中写真企画、航空測量をアジア航測株にそれぞれ委託した。
5. 本書に示す方位はすべて座標北を指す。
6. 本書に使用した遺構の表示は下記の略号に換る。  
SB—掘立柱建物 SD—溝・堀 SK—土壙 SP—ピット SX—不明遺構
7. 本書の執筆・編集は小林が担当した。

## 本　文　目　次

第1章 序　　説	1
第1節 調査の経過	1
第2節 地理的歴史的環境	2
第2章 調査の概要	9
第1節 若菜立萩遺跡の調査	9
1. 検出遺構	9
2. 出土遺物	13
3. 小　　結	17
第2節 若菜田中前遺跡の調査	23
1. 検出遺構	23
2. 出土遺物	25
3. 小　　結	28
第3節 若菜湖ノ江遺跡の調査	33
1. 検出遺構	33
2. 出土遺物	38
3. 小　　結	49

## 挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡分布図(1/25,000)	3
第2図	若菜立萩遺跡調査地点位置図(1/2,500)	6
第3図	若菜立萩遺跡遺構全体図(1/200)	折り込み
第4図	SD15土層断面実測図(1/40)	9
第5図	SD25土層断面実測図(1/40)	9
第6図	SD35土層断面実測図(1/40)	10
第7図	SD45土層断面実測図(1/40)	10
第8図	SD50土層断面実測図(1/40)	10
第9図	土壤・井戸・掘立柱建物実測図(1/40)	12
第10図	溝出土土器実測図①(1/3)	14
第11図	溝出土土器実測図②(1/3)	15
第12図	溝出土土器実測図③(1/3)	16
第13図	ピット・その他の出土土器実測図(1/3)	17
第14図	石器実測図(1/2)	17
第15図	若菜田中前遺跡調査地点位置図(1/2,500)	20
第16図	若菜田中前遺跡遺構全体図(1/200)	折り込み
第17図	SD1土層断面実測図(1/40)	23
第18図	SD4土層断面実測図(1/40)	24
第19図	SD5土層断面実測図(1/40)	24
第20図	SK2土層断面実測図(1/40)	24
第21図	溝出土土器実測図①(1/3)	26
第22図	溝出土土器実測図②(1/3)	27
第23図	SD5出土錢貨拓影(1/2)	27
第24図	若菜湖ノ江遺跡調査地点位置図(1/2,500)	30
第25図	若菜湖ノ江遺跡遺構全体図(1/400)	折り込み
第26図	土壤・掘立柱建物実測図(1/50)	35
第27図	溝出土土器実測図(1/3)	38
第28図	SD55出土土器実測図(1/3・1/6)	39
第29図	SD57出土土器実測図(1/3)	40
第30図	土壤出土遺物実測図(1/3)	41
第31図	SK35出土土器実測図①(1/3)	43
第32図	SK35出土土器実測図②(1/3)	44
第33図	SK35出土土器実測図③(1/3)	45
第34図	SX50出土土器実測図(1/3)	48
第35図	SX61・SP34・表土出土土器実測図(1/3)	49
第36図	石器実測図(1/2)	50

## 図版目次

- 図版1 ① 若菜立薪遺跡西調査区全景（西から）  
② 若菜立薪遺跡東調査区（西から）
- 図版2 ① 若菜立薪遺跡SB20（北から）  
② 若菜立薪遺跡SD05（南から）
- 図版3 ① 若菜立薪遺跡SD10・SD15（南から）  
② 若菜立薪遺跡SD25・SK11・SK47（南から）
- 図版4 ① 若菜立薪遺跡SD35・SK12・SK13（南から）  
② 若菜立薪遺跡SD40・SK28・SK36・SK42・ピット群（南から）
- 図版5 ① 若菜立薪遺跡SD45・SD50・SK52（南から）  
② 若菜立薪遺跡SD49・SD51（東から）
- 図版6 ① 若菜立薪遺跡SE55（北から）  
② 若菜立薪遺跡ピット群（東から）
- 図版7 ① 若菜田中前遺跡西側調査区全景（東から）  
② 若菜田中前遺跡南側調査区全景（北から）
- 図版8 ① 若菜田中前遺跡SD5（北から）  
② 若菜田中前遺跡SD4（南から）
- 図版9 ① 若菜田中前遺跡SK2・SK3（南から）  
② 若菜田中前遺跡調査風景
- 図版10 ① 若菜湖ノ江遺跡東側調査区遠景（空中写真、西から）  
② 若菜湖ノ江遺跡東側調査区（空中写真、真上から）
- 図版11 ① 若菜湖ノ江遺跡中央調査区全景（空中写真、真上から）  
② 若菜湖ノ江遺跡西側調査区（空中写真、真上から）
- 図版12 ① 若菜湖ノ江遺跡西側調査区（空中写真、真上から）  
② 若菜湖ノ江遺跡SD55土層断面（南から）
- 図版13 ① 若菜湖ノ江遺跡SK35（北から）  
北部第二地区遺跡群出土遺物
- 図版14 北部第二地区遺跡群出土遺物
- 図版15 北部第二地区遺跡群出土遺物
- 図版16 北部第二地区遺跡群出土遺物
- 図版17 北部第二地区遺跡群出土遺物
- 図版18 若菜湖ノ江遺跡SK35出土  
北部第二地区遺跡群出土遺物

# 第1章 序 説

## 第1節 調査の経過

筑後市は豊富な土地を利用した平地農村地帯として、稲作農耕が盛んに行われてきた場所で、古代には現在のほ場整備の基盤となった条里制により、農耕の向上が施されてきた。しかしながら、近代農業の構造の改善に伴い、ハウスでの園芸や栽培といった施設園芸が導入され、近年の農業経営は多様化してきている。そのため、耕作地の不整形・狭小や道路復員の狭小などの諸問題が取り沙汰されてきた。

こうした状況の中、筑後市でも耕地の集團化、区画の整理、農道の整備、用排水路の分離など汎用化を図るために、平成4年度からは場整備事業が実施されるようになった。

平成6年度に実施した筑後北部第二地区遺跡群の発掘調査は、これに絡む県営ほ場整備事業北部第二地区的平成6年度工事予定地で行われたもので、平成6年3月、福岡県筑後川水系農地開発事務所から筑後市教育委員会へ、予定地内の埋蔵文化財の確認依頼があった。筑後市教育委員会ではこれを受け、同年3月に試掘調査を実施した。その結果、工事予定地内に埋蔵文化財が認められたため事業関係者にその旨回答し協議を行い、「筑後市北部第二地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査」として工事予定地内的一部を調査することになった。埋蔵文化財発掘調査の費用については国、県からの一部、補助を受け、受益者負担分については文化財担当部局で負担、残る費用については水系事務所にて準備することで合意した。

調査は、平成6年4月に「若菜立薪遺跡」、7月から「若菜田中前遺跡」、8月から「若菜湖ノ江遺跡」を実施し、10月には調査を終了した。遺物の整理および報告書作成は筑後市役所内文化財整理室にて行った。

調査に際しては、福岡県筑後川水系農地開発事務所、筑後北部第二地区土地改良区に多大なご協力を頂き、また次の方々に有意義な御指示・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。伊崎俊秋（福岡県教育庁南筑後教育事務所）、大石昇、近澤康治、富永直樹、白木守（久留米市教育委員会）、狹川真一、山村信榮（太宰府市教育委員会）、大塚恵治（八女市教育委員会）、柴田剛（財團法人君津都市文化財センター）

なお、発掘調査および整理作業の関係者は次のとおりである。

### 1) 調査主体

筑後市教育委員会

### 2) 総括

教育長	森田基之	技師	永見秀徳
教育部長	津留忠義	小林勇作	(調査担当)
社会教育課長	下川雅晴	塙本映子	(嘱託)
社会教育係長	松永盛四郎		

### 3) 発掘調査参加者(順不同、敬称略)

大島真一郎(調査補助員)、愛川一枝、今村鈴子、太田黒三枝、大石新一、奥村太郎、

小野清次、小野ミノブ、加藤礼子、蒲池京子、北島トモエ、下川町子、古賀妙子、田島好江、壇ちえ子、中沢やよい、野田洋子、馬場孝司、矢次和枝、吉田裕、吉田喜美子

#### 4) 整理作業参加者（順不同、敬称略）

平塚あけみ（整理補助員）、大島真一郎（調査補助員）、奥村太郎、桜木千鶴、野間口靖子、野田洋子、馬場敦子、深川善子、湊まど香

## 第2節 地理的歴史的環境

筑後市は福岡県の南部、筑後平野のほぼ中央に位置する。地理的環境から概観すると、北は九州脊脈の麓、筑後平野が広がり、東は筑後川の南に東西に延びる耳納山系、南は筑肥山系に囲まれる。耳納山系の南端裾野から派生する丘陵（八女丘陵）は筑後市の北東部に広がり、標高15~30mのハッカ手状に延びる起状に富んだ地形をなす。これより南は低位段丘、西は標高5m位の低湿地帯へと移行する。

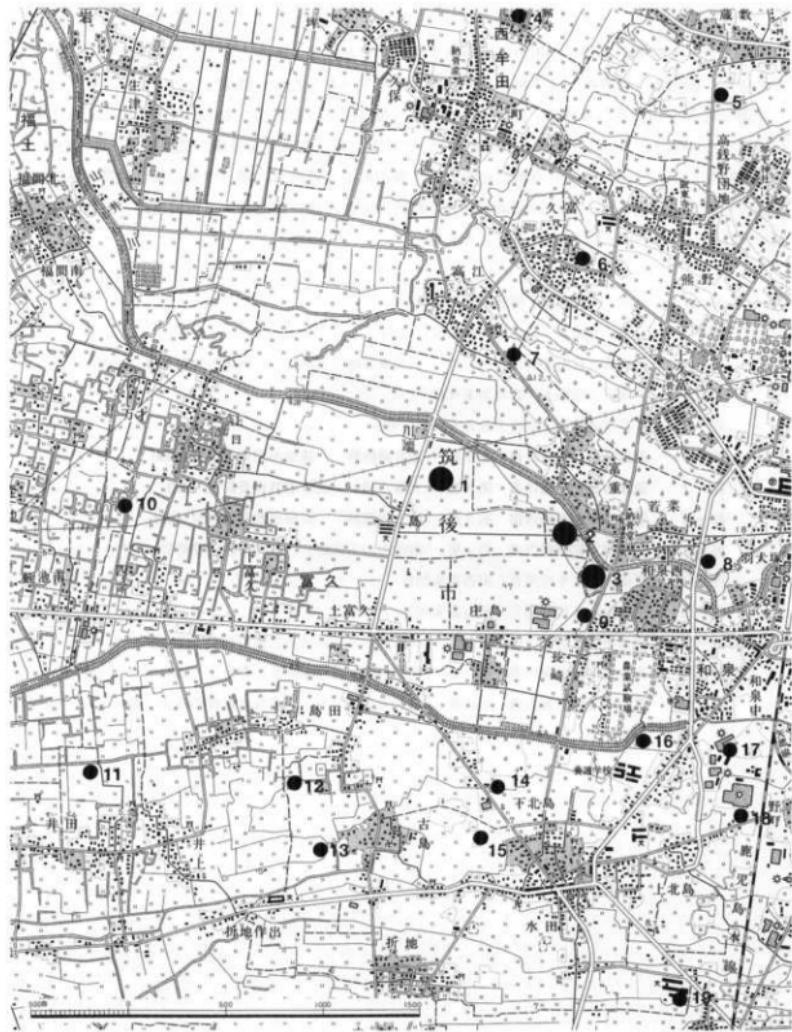
筑後市を代表する3つの河川は、市の中央を流れる山ノ井川をはじめ、江戸時代の人工河川とされる花宗川、南端には矢部川が西流する。この矢部川では、ゲンジ蟹の生息地として国の天然記念物の指定になっており、毎年5月下旬から6月初頭まで蟹を観測することができる。また、この地区は本市の観光拠点として賑わう船小屋温泉郷があり、江戸時代からの湯治場として有名である。筑後市の忠臣となる羽衣塚は、縦断する209号線およびJR鹿児島本線と横断する国道442号とが交差するところで、周囲は旧街道の宿場町として江戸時代から反映した地区でもある。産業では機械化の進んだ水田農業、酪農、梨、葡萄といった特色のある農業を主体とし、久留米紺や手すき和紙といった家内工業や機械、食品といった工業が中心となり、農業と工業が調和のとれた都市となっている。

次に歴史的環境について述べる。本市では縄文時代からの遺跡が数多く存在する。縄文時代の遺跡としては、坊田遺跡<sup>II-1</sup>、空山遺跡<sup>II-2</sup>、石塚遺跡<sup>II-3</sup>、裏山遺跡などが挙げられ、特に裏山遺跡では住居跡、石器・押型文土器を多数出土している。また縄文～弥生時代の複合遺跡である鶴田岸添遺跡では、落し穴や竪穴住居、焼失住居、などを発見している。

弥生時代では、亀ノ甲式土器の形態を引き継ぐ平塚遺跡や板付I式・夜臼～須玖式土器を出土した常用遺跡<sup>II-5</sup>、板付式土器、弥生～古墳時代の複合遺跡であり多くの竪穴住居跡を検出した藏敷森ノ木遺跡など市内の全域から発見している。

北東部に広がる八女丘陵上には、武装石人として有名な石人山古墳（前方後円墳）や造出しが付設した欠塚古墳（前方後円墳：平成6年度古墳整備終了）、装飾古墳である弘化谷古墳（円墳）が点在する。古墳はこの他に、竪穴系横口式石室の瑞王寺古墳（円墳：消滅）や千人塚古墳（円墳？）などが点在するが、現状からは実態がつかみにくい。

平安・奈良時代の遺跡では集落跡である前津中の玉遺跡や平成4年度に調査した若菜遺跡がある。若菜遺跡では400軒を超える竪穴住居跡を検出し、このほか縄文時代の落し穴や中世の掘立柱建物跡、江戸時代の道路跡など時代の複合した遺跡である。また、鶴田市ノ塚遺跡では古代官道である「西海



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

- |            |               |             |             |
|------------|---------------|-------------|-------------|
| 1. 若菜立萩遺跡  | 2. 若菜田中前遺跡    | 3. 若菜湖ノ江遺跡  | 4. 驚寺遺跡     |
| 5. 藏教森ノ木遺跡 | 6. 久富鳥居遺跡     | 7. 高江遺跡     | 8. 若菜遺跡     |
| 9. 坊田遺跡    | 10. 四ヶ所古四ヶ所遺跡 | 11. 井田西中野遺跡 | 12. 島田三反田遺跡 |
| 13. 古島島相遺跡 | 14. 久清遺跡      | 15. 下北島櫻嶺遺跡 | 16. 下北島B遺跡  |
| 17. 井原口遺跡  | 18. 狐塚遺跡      | 19. 山伏遺跡    |             |

道」跡とされる遺構を確認し、市のほぼ中央を縦断すると推定された古道の存在をほぼ裏づけることができた。鶴田市ノ塚遺跡では中世の掘立柱建物跡や井戸なども多く確認している。

本書で報告する若菜立軒遺跡、若菜田中前遺跡、若菜湖ノ江遺跡は、本市のほぼ中央にあたる場所に位置する。周辺は水田に囲まれた低位段丘で、これより西は標高5m未満の低湿地帯へと移行する。各遺跡は先に記した山ノ井川の南側に存在する。周辺の主な遺跡は古墳～中世の複合遺跡である高江遺跡や中世の区画溝を確認した坊田遺跡、弥生時代～中世の複合遺跡である櫻崎遺跡、近世の集落遺跡である四ヶ所古四ヶ所遺跡などが挙げられる。<sup>註-12</sup><sup>註-13</sup><sup>註-14</sup>

註-1 平成3年度調査

註-2 「裏山遺跡」 筑後市教育委員会 1966

註-3 筑後市文化財報告書 第12集「筑後東部地区遺跡群」 筑後市教育委員会 1994

註-4 平成3年度調査

註-5 「狐塚遺跡」 筑後市教育委員会 1970

註-6 筑後市文化財報告書 第6集「蔵敷遺跡群」 筑後市教育委員会 1990

註-7 筑後市文化財報告書 第8集「欠塚古墳」 筑後市教育委員会 1993

註-8 筑後市文化財報告書 第3集「瑞王寺古墳」 筑後市教育委員会 1984

註-9 筑後市文化財報告書 第4集「前津中の玉遺跡」 筑後市教育委員会 1987

註-10 平成4～6年度調査

註-11 平成5～6年度調査

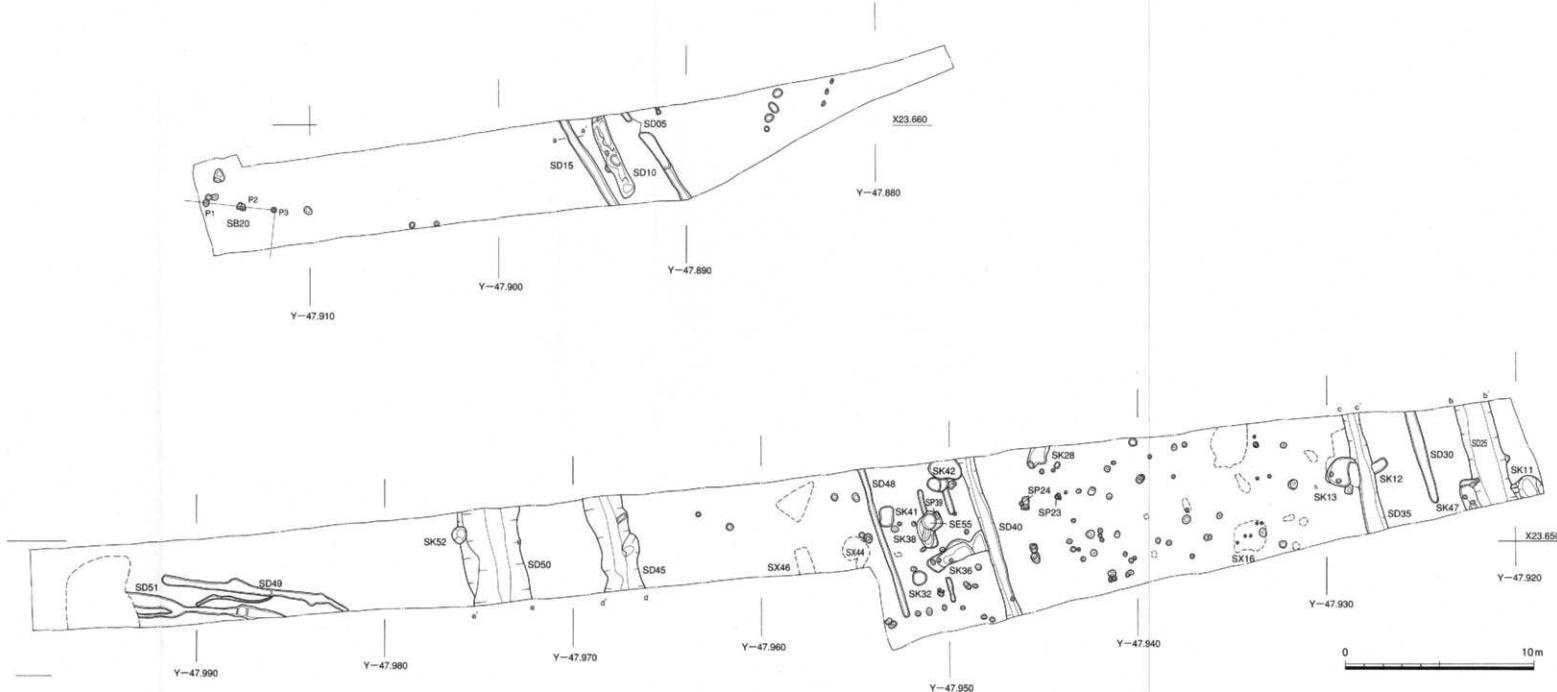
註-12 筑後市文化財報告書 第7集「高江遺跡」 筑後市教育委員会 1991

註-13 筑後市文化財報告書 第9集「櫻崎遺跡」 筑後市教育委員会 1993

註-14 筑後市文化財報告書 第10集「四ヶ所古四ヶ所」 筑後市教育委員会 1994

若 菜 立 莧 遺 跡





第3図 若葉立森遺跡遺構全体図 (1/200)

## 第2章 調査の概要

### 第1節 若菜立薪遺跡の調査

若菜立薪遺跡は筑後市大字若菜161-1外に所在する。試掘調査により遺跡の所在を確認し、関係者との協議のうえ、東西に走る支線用排水路設置により遺構が掘削される地区を調査対象とした。調査は平成6年4月18日から7月15日までの約3ヶ月間に亘って実施し、調査面積は約500m<sup>2</sup>であった。重機を搬入し、厚さ15cm程の表土と10cm程の包含層を剥ぐと遺構面が現れた。遺構は調査区のほぼ中央からピット、井戸、溝などが検出され、遺構の掘り下げ、平面実測図、写真撮影などを行い、7月8日調査区全体の写真撮影を実施し、調査を終了した。

以下、検出遺構及び出土遺物について述べる。

#### 1. 検出遺構

##### 溝

###### SD05 (第3図、図版2-②)

調査区の東側から4.3m検出し、南北に延びる幅約50cm、深さ10cmを測る浅い溝を検出した。埋土は濃黒褐色土で断面はU字型を呈し、出土遺物は弥生土器、土師器が認められた。

###### SD10 (第3図、図版3-①)

SD05の西隣りに平行して走る溝を4.5m検出した。上幅70~80cm、下幅25~60cm、深さ20~45cmを測るもので、溝底部は不定型である。出土遺物は弥生土器をわずかに出土した。

###### SD15 (第3・4図、図版3-①)

SD10とほぼ平行に検出した溝で、5.3mを検出し、規模は上幅40~50cm、下幅30~40cm、深さ4~7cmを測る。黒色粘質土の堆積で、溝の底面はフラット、断面は緩やかなU字状を呈する。出土遺物は弥生土器、土師器、磁器を認める。

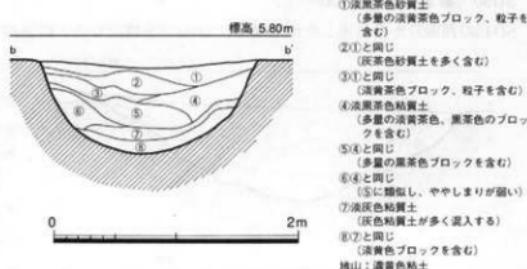
###### SD25

###### (第3・5図、図版3-②)

南北に延びる溝を5.5m検出し、溝の南部はSK11、SK47と付随する。上幅180~190cm、下幅90~120cm、深さ65~76cmを測り、溝の断面はU字状を呈する。溝の堆積土は淡黒茶色粘質土→淡灰色粘質土で、遺物は弥生土器、土師器、青磁、白磁を出土した。



第4図 SD15土層断面実測図 (1/40)



第5図 SD25土層断面実測図 (1/40)

### SD30 (第3図)

SD25とほぼ平行に南北に延びる溝で5.0mを検出した。上幅40~60cm、下幅34~54cm、深さ3~5cmを測り、堆積土は灰色粘質土であった。溝底面はフラットで、須恵器、土師器、青磁、白磁を出土した。

### SD35 (第3・6図、図版4-①)

南北に延び、上幅85~103cm、下幅35~65cm、深さ37~47cmを測る。6.3m検出し、途中、SK12、SK13に切られ、断面はU字状を呈する。堆積土は淡黒茶色粘質土→灰茶色粘質土→明黒茶色粘質土で、遺物は、須恵器、土師器のほか多量の焼土塊を出土し、最下層からは土師器を認めた。

### SD40 (第3図、図版4-②)

8.75m検出した南北溝である。上幅55~80cm、下幅20~50cm、深さ10~17cmを測り、堆積土は灰茶色粘質土であった。断面はU字状を呈し、出土遺物は須恵器のほか土師器を認めた。

### SD45 (第3・7図、図版5-①)

調査区の西側で検出した南北溝で、5.1m分を確認した。溝の東側には各所に段落ちやビットが見られ、底面は概ね平坦である。堆積土は黒茶色粘質土→灰茶色粘質土で、須恵器、土師器をわずかに出土した。

### SD48 (第3図)

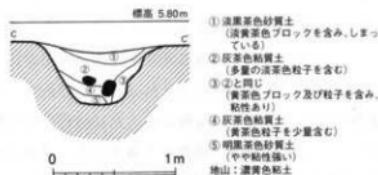
8.1m検出した浅い南北溝で、堆積土は灰色土であった。遺物は出土していない。

### SD49 (第3図、図版5-②)

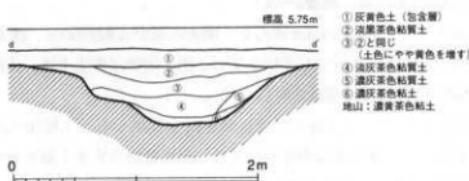
調査区の西端から検出した東西方向の浅い溝で、10.0m分を確認した。堆積土は黒茶色粘質土で、出土遺物はない。

### SD50 (第3・8図、図版5-①)

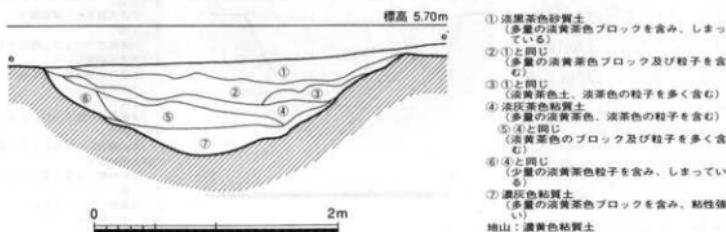
SD45の西隣りから検出した南北溝で、5.0m分を確認した。底面はほぼフラットな状態で、断面は



第6図 SD35土層断面実測図(1/40)



第7図 SD45土層断面実測図(1/40)



第8図 SD50土層断面実測図(1/40)

U字状を呈している。堆積土は黒茶色粘質土→灰茶色粘質土→灰色粘質土で、須恵器、土師器を数点出土した。

**SD51 (第3図、図版5-②)**

SD49に隣接した東西方向の浅い溝で、7.4m分を確認し、溝の西部は途中枝別れする。堆積土は黒茶色粘質土で、出土遺物は認めない。

**掘立柱建物**

**SB20 (第9図、図版2-①)**

調査区の東側で検出した柵列状に並ぶピットで、掘立柱建物跡と考えられる。ピットはN-6°-Eの方向で並び、柱間は1.6m~2.0mを測る。柱痕はP1で確認し、柱の径は12cmを測るもので、掘形には淡灰色粘質土+濃黄色粘質土、柱痕には黒褐色土の堆積が見られた。殆どのピットが梢円形を呈し、埋土は淡灰色土であった。出土遺物はなかったため時期決定には至らなかった。

**土 壤**

**SK11 (第9図、図版3-②)**

SD25に切られた梢円形状の土壤で、埋土は淡灰色粘質土を呈する。出土遺物はなく、幅は130.0cmを測る。土壤底部西側のSD25と交わる部分では、断面がU字状の掘込みを確認し、溝との関連構造である可能性がある。

**SK12 (第9図、図版4-①)**

SD35に切られた隅丸方形形状の土壤で、埋土は黒灰色土であった。幅は、87cm程度を測り、出土遺物はなかった。

**SK28 (第3図、図版4-②)**

調査区のほぼ中央で検出した不定形な土壤で、底部南側にピットを有する。長軸27cm、短軸19cm、深さ33cmを測り、遺物は土師器を僅かに認めた。

**SK32 (第9図)**

調査区のほぼ中央で検出した隅丸方形を呈した土壤である。径は75cm、深さ14cmを測り、遺物は出土しなかった。

**SK36 (第9図、図版4-②)**

調査区のほぼ中央で検出した隅丸長方形形状の土壤である。土壤の東側はSD40に切られ、長軸330cm、短軸70~110cmを測り、土壤の底部は不定形で深さは8~49cmを測る。黒褐色土の埋土から弥生土器、土師器、青磁が数点出土した。

**SK38 (第9図)**

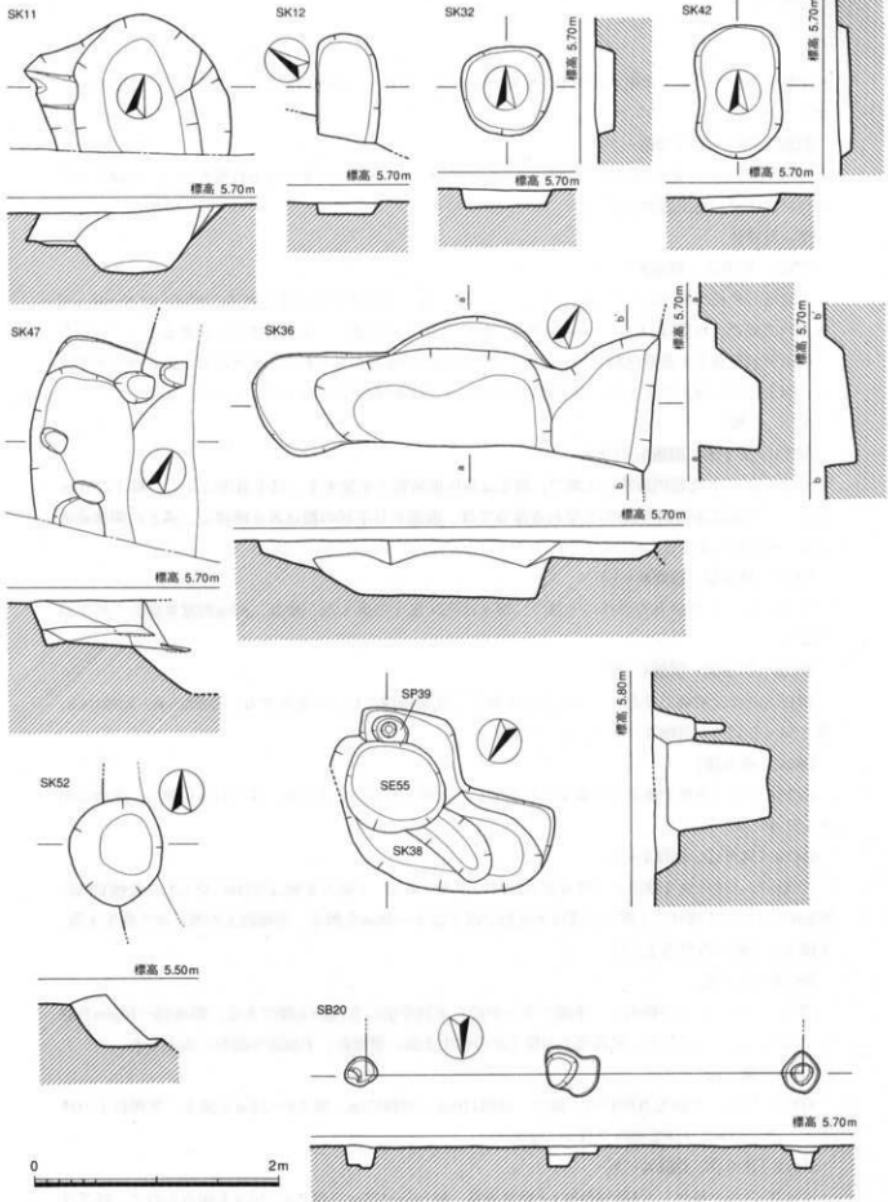
調査区のほぼ中央で検出し、平面プランが逆L字状を呈した浅い土壤である。幅は75~105cmを測り、深さは20cmであった。黒褐色土の埋土から弥生土器、須恵器、土師器が僅かに出土した。

**SK41 (第3図)**

SD48に隣接した隅丸方形形状の土壤で、長軸110cm、短軸67cm、深さ8~14cmを測る。黒褐色土の埋土で、出土遺物は土師器細片を僅かに認めた。

**SK42 (第9図、図版4-②)**

SD40の北西で検出した梢円形状の土壤である。幅100~175cm、深さ6~10cmを測るもので、底部はほぼ平坦である。土師器細片を認めた。



第9図 土壌・井戸・掘立柱建物実測図 (1/40)

#### SK47 (第9図、図版3-②)

SD25と隣接した楕円形状の土壤で、検出時の切り合ではなく、埋土は淡灰色粘質土であった。出土遺物はなく、土壤の幅は85~160cmを測り、底部にはピットを確認する。SD25、SK11の関連遺構と考える。

#### SK52 (第9図、図版5-①)

SD50を切るように検出した楕円形状の土壤で、埋土は淡灰色粘質土であった。出土遺物はなく、土壤の幅は76cm、深さは43cmを測る。

#### 井 戸

#### SE55 (第9図、図版6-①)

SK38の底部から確認した円形状を呈する素掘りで、径は80cm、深さは83~89cmを測る。上層は灰褐色土、下層は青灰色粘質土+灰色砂粒混じりで、遺物の出土はなかった。

その他の遺構

#### SX16 (第3図)

灰色土を埋土とする楕円形状の浅いもので、長軸170cm、短軸150cmを測る。遺物は土師器と陶器を僅かに認めた。

#### SX44 (第3図)

灰色土を埋土とする不定形なもので、幅は90~130cmを測る。遺物は弥生土器、須恵器、土師器を数点出土した。

#### SX46 (第3図)

灰色土を埋土とする長方形のカクランで幅は80cmを測る。遺物は弥生土器、土師器を出土した。

## 2. 出 土 遺 物

#### SD05 (第10図、図版13)

##### 土 師 器

皿 (1) 淡赤褐色を呈し、口径9.6cm、底径6.0cm、器高2.0cmを測る。口縁部はやや外反し、風化が激しいため調整は不明である。

杯 (2) 淡茶褐色を呈し、口径 10.6cm、底径 6.4cm、器高 2.9cmを測る。底部外面はヘラ切りで、内外面はヨコナデ調整である。

#### SD15 (第10図、図版16)

##### 越州窯系青磁

碗 (3) I-2-a。底径7.6cmを測り、見込みに5箇所の目跡が残る。脛付けにも若干の目跡を残し、やや茶色を帯びた青灰釉を全面に施し、胎土はきめ細かい灰白色である。

#### SD25 (第10・11図、図版13・15・16)

##### 土 師 器

鍋 (4) 口縁端部に断面が台形状の貼付突巻を施し、淡赤褐色を呈する。内面はナデ、外面はヨコナデ調整を施し、胎土は細砂粒を多く含む。

釜 (5・6) 5は復原口径15.0cmを測り、口縁部はほぼ直に立上がる。肩部に沈線と押型文を施し、口縁部内面は刷毛目、肩部内面はナデ、口縁部外面はヨコナデ調整である。6は復原口径16.0cmを測

り、口縁部はやや内湾する。口縁部外面に刷毛目、肩部外面に突帯をそれぞれ施し、口縁部内外面はヨコナデ、肩部内面は指頭圧痕、体部内面はナデ調整を施し、外面体部の調整は不明である。

鉢 (7) 復原口径29.0cmを測る。口縁部は内側に張出し、色調は淡茶褐色を呈する。風化が激しいため、内外面の調整は不明である。

火鉢 (8・9) 8・9は共に口縁部外面に菊花文のスタンプと波状の櫛目、2条の貼付突帯を施す。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡灰褐色を呈する。8は復原口径39.2cm、復原底径22.5cm、器高31.2cmを測り、9は復原口径41.0cmを測る。

#### SD35 (第12図、図版15)

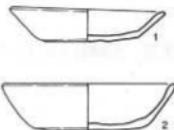
##### 須恵器

甕 (10) 甕の細片で、体部外面には格子目、内面には同心円のタタキが残る。

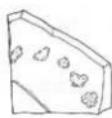
##### 土師器

鍋 (11~13) 11・12は口縁端部に玉縁状の貼付突帯を施し、茶褐色を呈する。共に内面は横向の刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデ調整を施し、胎土は細砂粒を多く含む。13は

SD05



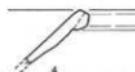
SD15



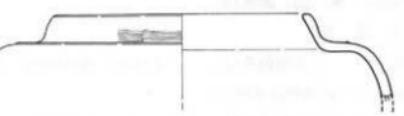
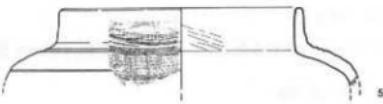
SD25



13

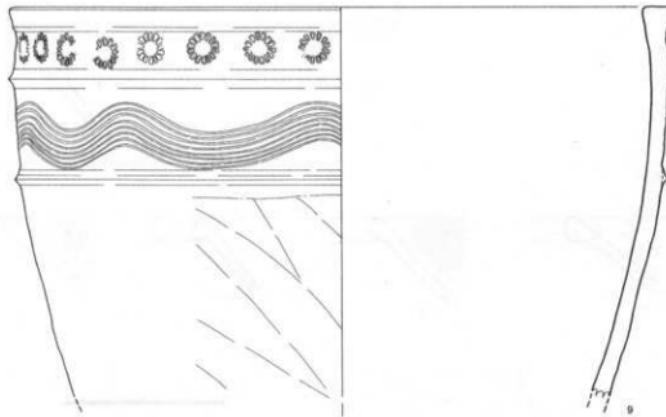
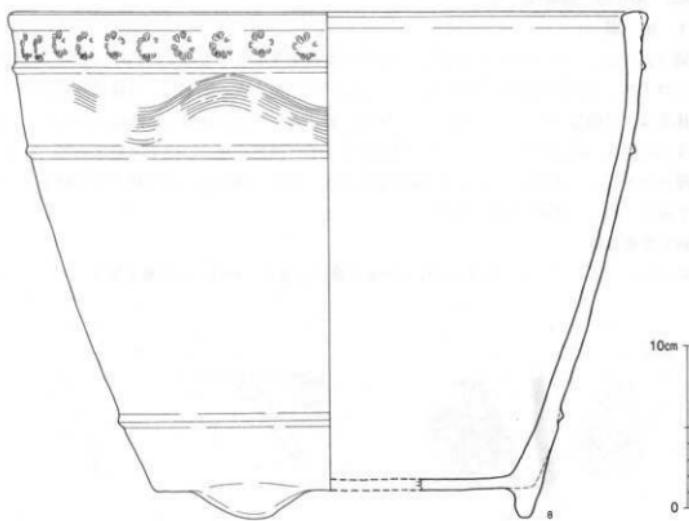


4



第10図 溝出土土器実測図① (1/3)

SD25



第11図 溝出土土器実測図② (1/3)

復原口径41.6cmを測る。口縁端部に玉縁状の貼付突帯を施し、外面には煤が付着する。内面は調整不明で、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は横方向の刷毛目およびヨコナデ調整を施す。

#### SD50 (第12図、図版15・16)

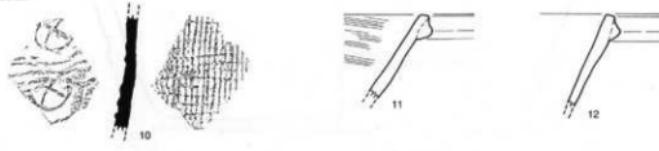
##### 土 師 器

鍋 (14~17) 14・15は口縁端部に玉縁状の貼付突帯を施すもので、14の内面および口縁部外面はヨコナデ、外面体部はナデ調整を施す。15の内面は横方向の刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、外面体部はナデ調整を施し、外面体部には煤が付着する。16は口縁端部に断面が台形状の貼付突帯を施すもので、口縁部外面はヨコナデ、外面体部はナデ調整を施し、内面調整は不明。17は口縁部の器壁がやや厚く、素口縁となる。口縁端部に沈線が残り、調整は内面が横方向の刷毛目、外面がナデである。胎土に細砂粒を多く含む。

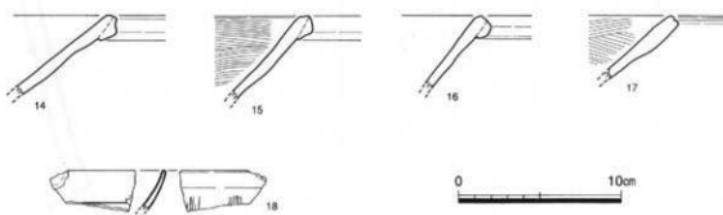
##### 同安窯系青磁

碗 (18) I-1-b. 口縁部細片で外面に櫛目を認め、胎色の透明釉を施す。

SD35



SD50



第12図 溝出土土器実測図③ (1/3)

### SB20-P1 (第13図、図版13)

#### 土 師 器

皿 (19) 復原口径8.0cm、復原底径6.5cm、器高1.5cmを測る。底面は糸切りで、内外面の調整はナデを施す。

### SP23 (第13図、図版13)

#### 土 師 器

环 (22) 口縁部はやや外反し、復原口径13.4cm、復原底径9.2cm、器高2.9cmを計る。底部外面は糸切りで、内外面はヨコナデ調整を施す。

### SP24 (第13図、図版13)

#### 土 師 器

皿 (20) 口縁部はやや内湾し、底部外面は糸切りで、内外面はヨコナデ調整を施す。口径8.0cm、底径5.2cm、器高1.7cmを測る。

### SP39 (第13図、図版13)

#### 土 師 器

皿 (21) 乳茶褐色を呈し、復原口径7.4cm、復原底径5.2cm、器高1.6cmを測る。底面は糸切りで、風化が激しいため調整は不明である。

### 表土 (第13図、図版17)

#### 陶 器

碗 (23) 復原高台径は4.6cmを測るもので、乳灰茶色の釉を施す。見込みは釉を掻取り、底部は露胎である。

### 石器 (第14図)

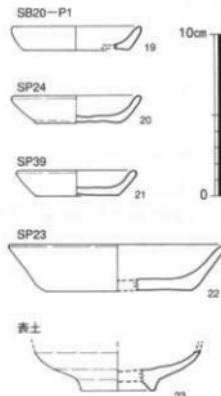
石鎌 (24) 黒曜石製で、抉りのある正三角形状を呈する剥片鎌で、片脚端を欠損する。両面の両脚端に細かな刃部を作り出す。

## 3. 小 結

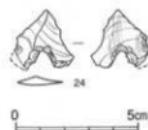
主要な遺構について記述してまとめとしたい。

調査区から検出された溝の中で、主要と捉えられるSD25・SD35・SD45・SD50は断面がU字状を呈し、全て南北を主軸とするものである。出土遺物に土師器や陶磁器を認め、時期については概ね14~15C代に比定できるが、従来の輸入陶磁器と在地土器との照合を考えると年代では若干の誤差が生じるものと考える。周辺で調査された若菜遺跡や長崎坊田遺跡からは、中世の居館跡が確認されており、当時の莊園にみられる勢力争いがあったとされる意見があり、今回確認された遺構についても居館跡と推察される。

SD25・SD35とSD45・SD50との間には区画された土地が存在する。ここからは生活を匂わせる井戸や土壤、ビット群が確認され、先に記述した溝と平行する遺物は認められなかったが、調査所見から同時期に比定できるものと考える。



第13図 ピット・その他の出土器実測図 (1/3)



第14図 石器実測図 (1/2)

一方、区画溝の東側に位置する掘立柱建物跡（SB20）についても出土遺物は皆無であったため、時期決定には至っていない。なお、SB20については本報告のなかで敢えて掘立柱建物として報告したが、調査区の設定上、片側柱穴しか確認していないことから、柵列としての捉え方も否定できない。

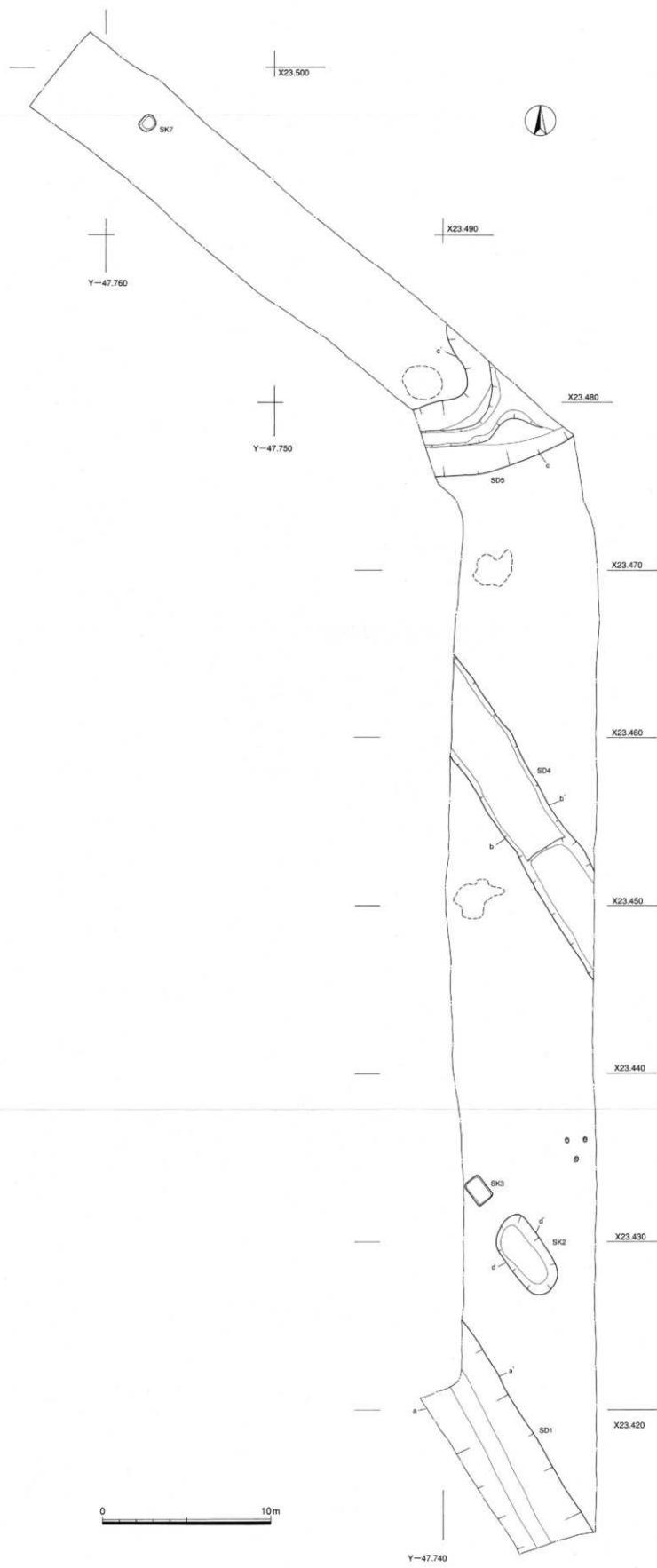
この他の遺構として、SD05・SD10・SD49・SD51は調査所見から弥生時代の自然流路として捉えられる。また、南北を主軸にもつ溝の中でSD30・SD40は著しく削平を受けているものの、出土遺物に土師器や陶磁器を認めるところから概ね14C代を比定するが、周辺遺構の流れ込みも考えられ、時期が下る可能性もある。

最後に、遺跡発掘調査の成果や文献による検討が不十分で中途半端な報告に留まってしまったため、機会をみて再検討することとした。

若菜田中前遺跡



第15図 若菜田中前遺跡調査地点位置図 (1/2,500)



## 第2節 若菜田中前遺跡の調査

若菜田中前遺跡は筑後市大字若菜61-1外に所在し、山ノ井川のすぐ南側に位置する。試掘調査により遺跡の所在を確認し、関係者との協議のうえ、東西および南北に走る支線用排水路設置により遺構が掘削される地区を調査対象とした。調査は平成6年7月21日から10月31日までの約3ヶ月間に亘って実施し、調査面積は約900m<sup>2</sup>であった。重機を搬入し、厚さ20cm程の表土と10cm程の包含層を重機にて剥ぐと遺構面が現れた。遺構は南北に延びる大溝などが検出され、遺構の掘り下げ、平面実測図、写真撮影などを行い、8月3日に調査区全体の写真撮影を実施した。

以下、検出遺構及び出土遺物について述べる。

### 1. 検出遺構

#### 溝

##### SD 1 (第16・17図)

調査区の東端から深さ80~150cmを測る深い溝を検出した。溝の南部は調査地区外となり溝の幅は確認できず、5.0m以上を測るものと思われる。埋土は濃黒褐色粘土~暗青灰色粘土で断面はU字型を呈し、出土遺物は須恵器、土師器、陶磁器、染付などが認められた。

##### SD 4 (第16・18図、図版8-②)

SD 1とはほぼ平行に走る溝で、調査区の東寄りで検出した。上幅350~370cm、下幅240~310cm、深さ30~50cmを測り、溝底部は途中段を有するもので、東部が深くなっている。埋土は黒灰色砂土~青灰色粘土で土中に砂粒や小砾を多く認める。出土遺物は弥生土器、土師器、陶器を出土した。

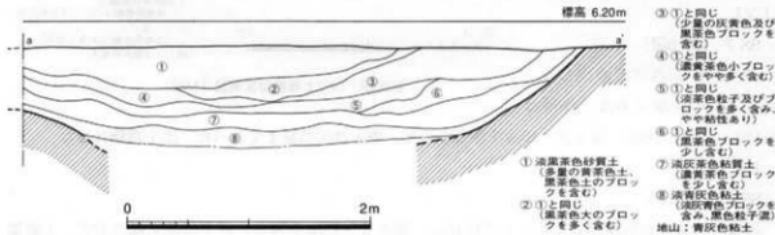
##### SD 5 (第16・19図、図版8-①)

調査区の中央から検出した溝で、北部に向かってやや広がっている。深さは21~37cmを測り、北部が次第に深くなる。堆積土は黒色粘質土~暗青灰色粘土で、断面は緩やかなU字状を呈する。出土遺物は土師器、陶磁器の他に下層から銅鏡(寛永通寶)を認める。

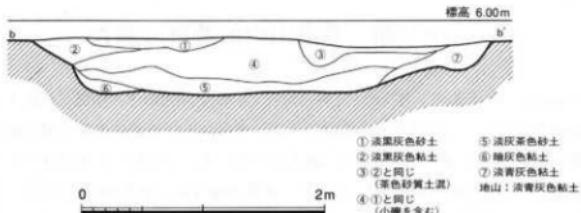
#### 土 壤

##### SK 2 (第16・20図、図版9-①)

調査区の東寄りで確認した隅丸長方形の土壌である。規模は長径484cm、短径245cm、深さ32~47cmを測るもので、埋土は灰色粘土であった。出土遺物は土師器および陶磁器をわずかに認めた。

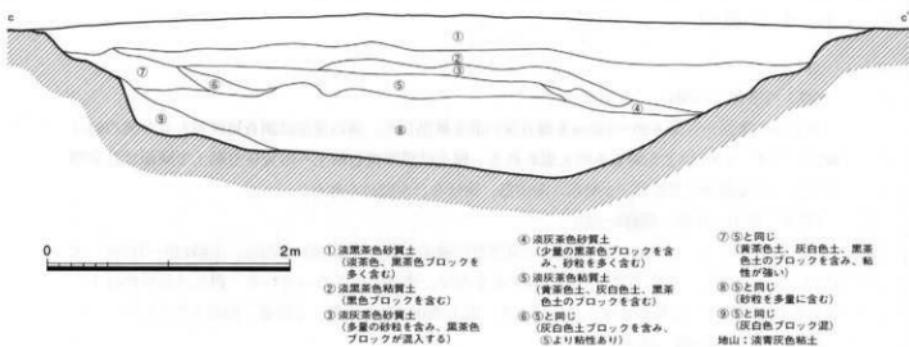


第17図 SD1土層断面実測図 (1/40)



第18図 SD4土層断面実測図 (1/40)

標高 6.20m



第19図 SD5土層断面実測図 (1/40)

### SK 3 (第16図、図版9-①)

SK 2のすぐ南で確認した長方形の土壤である。規模は長径155cm、短径113cm、深さ7~13cmを測るもので、埋土は灰色粘土であった。出土遺物はない。

### SK 7 (第16図)

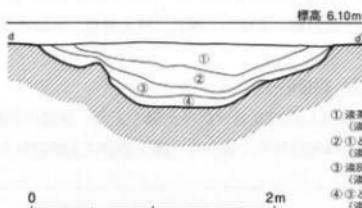
調査区の南西部で検出した隅丸方形の土壤である。規模は

長径97cm、短径86cm、深さ5~10cmを測るもので、埋土は灰色粘土であった。出土遺物はない。

### ビット

### SP 6 (第16図)

調査区の東側から検出したビットで径46cm、深さ8~22cmを測る。埋土は濃黒褐色土で、土師器をわずかに認めた。



第20図 SK2土層断面実測図 (1/40)

## 2. 出土遺物

### SD 1 (第21図、図版14)

#### 土師器

大甕 (25・26) 25は口縁部の一部で、口縁端部には台形状の貼付突帯を施す。色調は茶褐色、胎土は細砂粒を多く含み焼成は良好である。外面はヨコナデ、内面はナデ調整を施す。26も口縁部の一部細片で、口縁端部には三角形状の貼付突帯を施す。色調は淡灰色で胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良である。内外面はナデ調整を施す。

#### 陶器

摺鉢 (27・28) 27は、口縁部のみの細片で、内外面ともに無釉であるが茶紫色の着色を施す。すり目本数は不明。28は、底部の細片で、内外面ともに無釉である。外面には茶紫色の着色を施し、すり目は15本を一単位としている。

土瓶 (31) 茶褐色の胎土で、内外面共にヨコナデの調整。体部外面の上半部には灰釉がかかり、下半部は無釉で、煤が一部付着している。内面は無釉。復原口径は10.8cm、体部最大径は18.4cmを測り、焼成は良好である。

#### 施釉陶器

鉢 (29・30) 29は、復原口径38.0cmを測る。外面には緑青色、内面には乳茶色の釉薬を施し、胎土、焼成は共に良好。また口縁部外面には刷毛目文の絵柄を施し、内面の一部に煤が付着している。30は底部のみで、底径15.8cmを測る。外面の底部から体部にかけての一部には乳白色の釉を施し、高台設置部分は無釉である。また、この他は濃紫褐色の釉薬を施す。胎土、焼成は共に良好である。

皿 (32) 底径2.7cmを測り、胎土、焼成は良好である。高台部は露胎で高台内面は削りだし、その他には釉を施す。

#### 染付

碗 (33・34) 33は外面に呉須で松、竹の紋様を手描きする。復原口径8.6cm、底径3.3cm、器高4.0cmを測り、内外面共に透明釉を施す。また、口縁部、底部の一部に漆痕があり、補修をしたと考えられる。34はくらわんかで、外面にコンニャク印判による文様がある。見込みは釉を挿しつけており、復原口径11.6cm、底径4.7cm、器高4.9cmを測る。

#### 白磁

碗 (35) 底径7.3cmを測り、胎土は乳白色、釉薬は淡青色釉を施す。見込みには沈線があり、高台外部にヘラによる傷痕が残る。

仮飯具 (36) 高台底径は3.5cm、高台高は2.1cmを測り、高台底部外面は削りだしである。

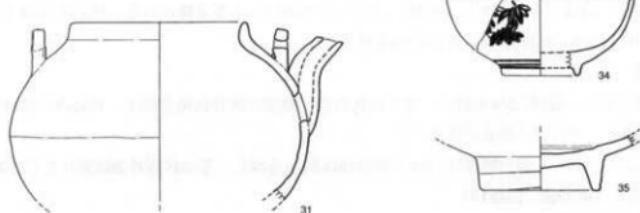
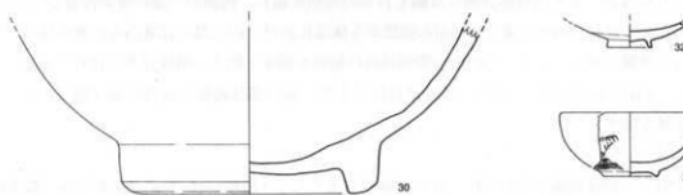
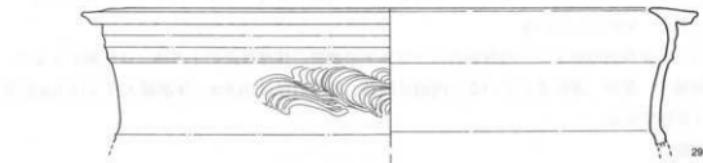
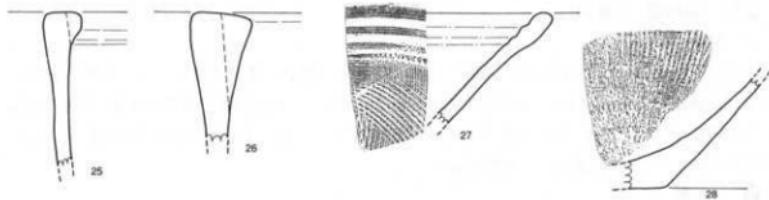
### SD 4 (第22図、図版14)

#### 弥生土器

壺 (37) 袋状口縁壺の細片で、色調は茶褐色、胎土は砂粒を多く含み焼成はやや不良である。

#### 土師器

小皿 (38) 口径9.2cm、底径8.0cm、器高2.4cmを測る完形品である。色調は淡灰褐色で胎土および焼成は良好で、内面にヘラ当て痕が残る。調整は口縁部内外面はヨコナデで、底部外面には糸切りおよび板目圧痕が残る。



第21図 溝出土土器実測図① (1/3)

坏 (39) 復原口径15.4cm、復原底径10.6cm、器高3.7cmを測る。調整は体部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は糸切りおよび板目压痕が残る。器壁は薄手で胎土は精選されている。

#### SD 5 (第22図、図版14)

##### 土 師 器

土鍋 (40) 色調は茶褐色で胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。内面はヨコ方向の細かい刷毛目を施し、外面には煤が付着している。

##### 陶 器

鉢 (42) 復原口径13.2cm、復原底径7.3cm、器高5.9cmを測る。底部から体部にかけては段を有しながらほぼ直に立上がり、口縁部は玉縁となる。調整は内面ヨコナデ、底部外面へラケズリで、内面の一部に煤が付着する。体部外面には白色で平行線文様を施し、口縁部から体部外面にかけて緑褐色の釉薬をかける。

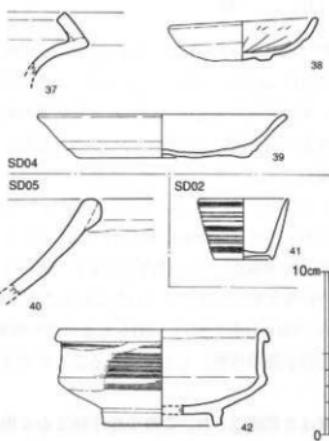
#### 錢貨 (第23図、図版14)

寛永通寶 (43~50) 全て完形品である。43~48は寛永13年 (1636年) 初鋤の古寛永通寶で、「寶」字の最後の3画に「ス」字が見られ、錢貨の直径は43・46~48が2.35cm、44は2.50cm、45は2.40cmを測る。49・50は寛文8年 (1668年) 初鋤の新寛永通寶で、「寶」字の最後の2画に「ハ」字が見られる。錢貨の直径は49が2.45cm、50が2.50cmを測る。

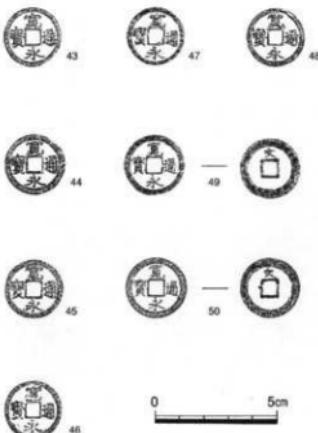
#### SK 2 (第22図、図版14)

##### 陶 器

ぐい呑み (41) 口径5.6cm、底径3.5cm、器高3.8cmを測る。胎土は淡乳灰色で淡青色の釉薬を施した後、赤色で平行線文様を施す。体部は底部からほぼ直に立上がる。



第22図 溝出土土器実測図② (1/3)



第23図 SD5出土錢貨拓影 (1/2)

### 3. 小 結

調査成果に基づき主要な遺構についてまとめると以下のようになる。

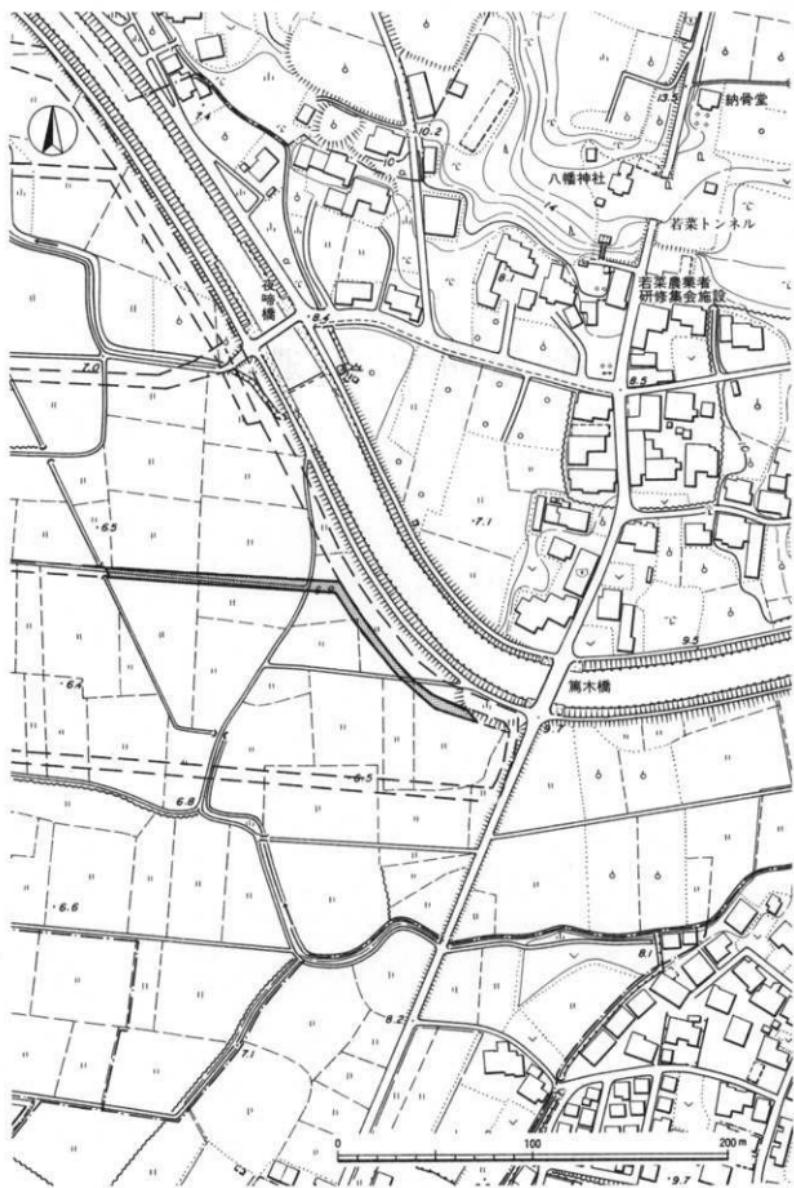
溝のSD 1は多量の染付（古伊万里）や近世陶器を出土していることから近世の遺構と位置付けられる。溝の南側は調査区に切られるため溝の幅は明らかでなかったが、推定で5m以上を測るもので、埋土の最下層は青灰色土のヘドロが堆積していることから、筑後市南西部に見られるクリークと同規模の水路であったと推定される。現在の地形をみると、調査区の北側を山ノ井川がやや蛇行しながら西流しているため、河川に付随した小河川とも位置付けられる。

ところで、同じ規模を呈するSD 5はこうした意味からも、河川の一部として捉えることができる。土師器、近世陶器などの遺物を出土し、溝の下層からは寛永通寶を出土していることから、遅くとも江戸時代中期には現存していたことも考えられる。

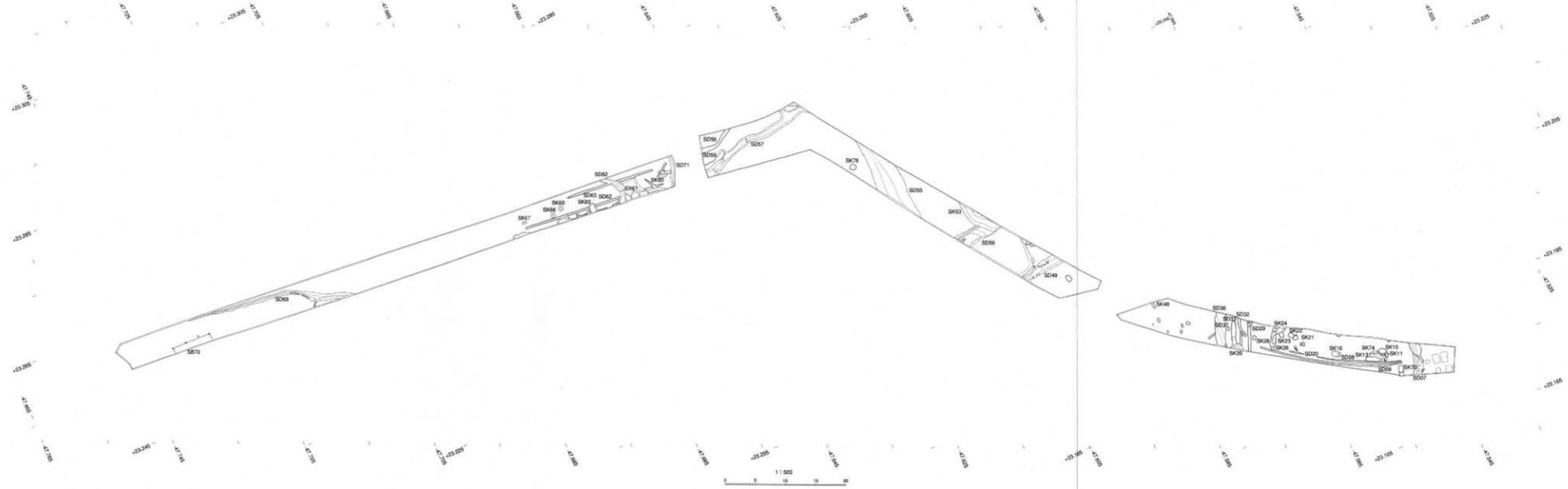
一方、SD 4は先のSD 1・SD 5とよく似た堆積土を呈するものの深さは比較的浅く、別の流路（用水路と排水路の区別）として捉えることができる。出土遺物からは年代を特定することができなかった。

土壤は3基確認され、このうちのSK 2から出土遺物を僅かに認めただけに留まった。SK 2はSD 1に近い場所に位置し、遺物は土師器と近世の陶磁器を出土していることから同時期として抑えることができる。

若菜湖ノ江遺跡



第24図 若菜湖ノ江遺跡調査地点位置図 (1/2,500)



第25図 若菜湖ノ江道路造構全体図 (1/500)

### 第3節 若菜湖ノ江遺跡の調査

若菜湖ノ江遺跡は筑後市大字若菜1030外に所在する。試掘調査により遺跡の所在を確認し、関係者との協議のうえ、東西および南北に走る支線用排水路設置により遺構が掘削される地区を調査対象とした。調査は平成6年8月5日から10月31日までの約3ヶ月間に亘って実施し、調査面積は1,225m<sup>2</sup>であった。重機を搬入し、厚さ15cm程の表土（灰色土）と10cm程の包含層（茶褐色土）を剥いだところで遺構面（黄茶色粘質土）を確認した。遺構は調査区の全体から掘立柱建物、溝、土塁、ピットなどが検出された。作業は遺構検出後、掘削、個別実測図、個別写真撮影などを行ったのち、遺構全体の空中写真および航空測量を実施し、調査を完了した。出土遺物の整理作業は発掘作業と平行して、筑後市役所内文化財整理室にて隨時行った。

以下、検出遺構について述べる。

#### 1. 検出遺構

##### 溝（第26図）

###### SD07

東部調査区の東側で南北に延びる幅約90cm、深さ16~20cmを測る溝を検出した。一部でカクランを受け、埋土は茶灰色土で断面はU字型を呈する。出土遺物は須恵器、土師器、陶磁器が認められた。

###### SD08・20

東部調査区の東側で確認し埋土は茶褐色土であった。遺物は磁器をわずかに出土した。

###### SD09

SD08と平行するように23.8m確認し、埋土も同じ茶褐色土で、一部炭化物を含んでいた。遺物は土師器、陶磁器を出土した。

###### SD29

南北に延びる溝で幅40~54cmを測る。出土遺物は土師器のほかに石鍋を認め、埋土中に木炭を出土している。埋土は黒褐色土であった。

###### SD32

南北に延び、南端はピットに切られる。幅40~52cmの浅い溝で、土師器細片をわずかに認める。

###### SD33

SD29とほぼ平行に走る溝で、幅74~78cmを測る。埋土は黒茶褐色土で、南端部はSK35に切られる。遺物は土師器、瓦器、陶磁器を出土した。

###### SD36

SD37に切られる溝で、幅160~180cmを測る。埋土は黒茶褐色土で、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器などの遺物を出土している。

###### SD37

幅60cmを測るもので、淡灰茶色土の埋土であった。土師器と青磁が出土。

#### **SD49**

中央調査区の東端から検出し、幅160～190cmを測る溝である。断面はU字状を呈し、埋土は淡灰茶色土である。溝底部には近世に打ち込んだと見られる木杭を数本確認し、土師器、瓦器、陶磁器の他に、不明革製品（図版18）を出土した。

#### **SD55（図版12-②）**

中央調査区の中央で確認した南北溝で、上幅410～470cm、下幅60～140cm、深さ126～140cmを測る。断面は逆台形状を呈し、土師器、瓦器、陶磁器などの遺物を数多く出土した。

#### **SD56**

東西に延びる溝で、SK53に切られる。幅50～64cmの浅い溝で、埋土は黒茶色土を呈する。遺物は土師器を出土した。

#### **SD57**

中央調査区の西端から検出した東西溝である。蛇行しながら南北に延びるもので、西へ行くに従い深くなっていた。黒色堆積土で、出土遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器を認めるが、弥生時代を考える。

#### **SD58**

SD57とほぼ平行に約6.0m検出した浅い溝である。黒褐色土の堆積で、遺物は認めない。

#### **SD59**

SD57に切られるように検出し埋土も同じ黒色土である。SD57よりも浅く、弥生土器のほかにサスカイトを認める。

#### **SD62・63**

西部調査区の東端で確認した溝で、灰茶色土を有し、出土遺物はなかった。田畠調整時の搅乱である。

#### **SD69**

西部調査区西端で確認した東西方向の溝で、一部が南へ分岐する。埋土はSD57と同様の黒色土であり、遺物は弥生土器を出土しており、SD57若しくはSD59の一連の溝と考える。

#### **SD71**

西部調査区西端で確認した南北溝で、現農道の側溝である。出土遺物なし。

#### **SD82**

西部調査区東端で確認した南北溝である。黒色土の堆積で幅80～130cmを測り、出土遺物はなかった。

#### **掘立柱建物**

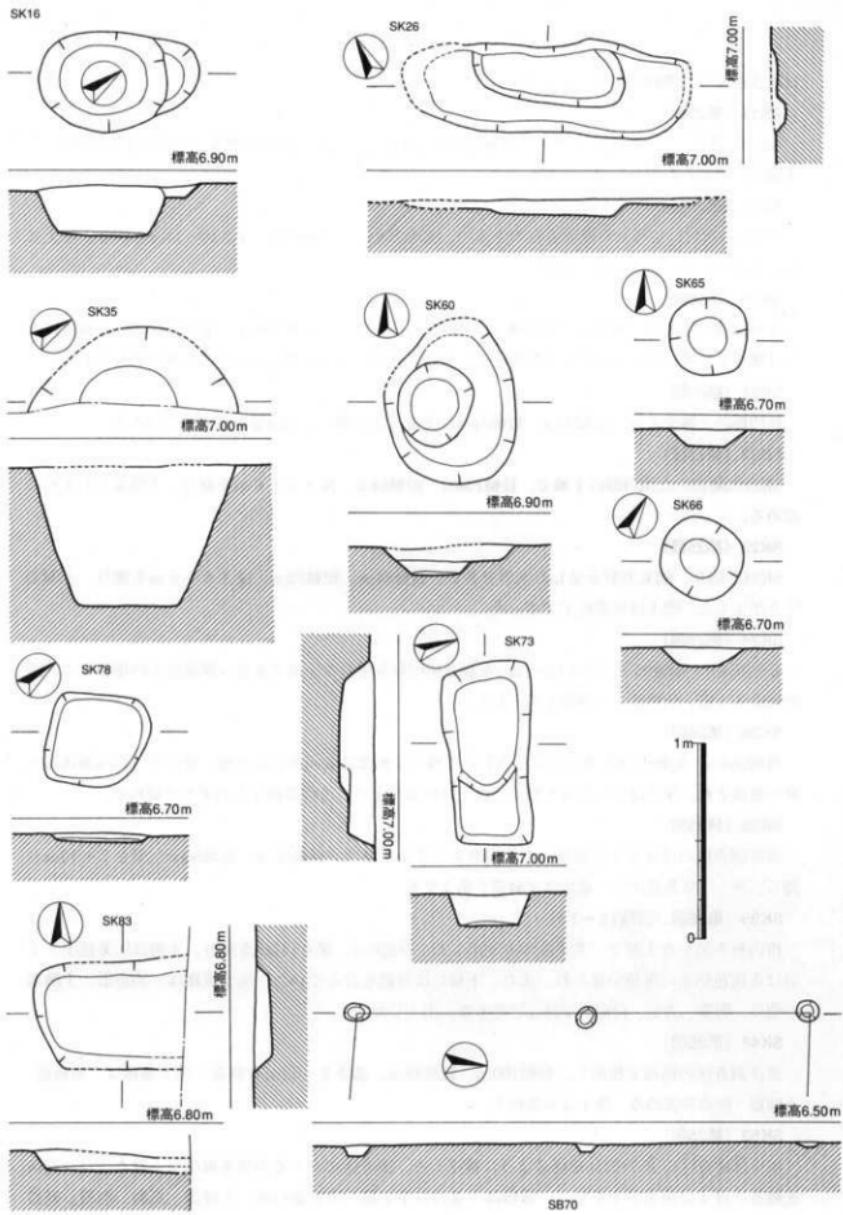
#### **SB70（第26図）**

西部調査区の西端で検出した2間×1間以上の建物と考える。残念ながら遺構の南北とも調査区外であったため検出不可能であった。柱穴の掘形は、径18～28cm、深さ4～12cmを測るもので、出土遺物はなかった。棟方向はN-3°50'-Wを示す。

#### **土 壤**

#### **SK10（第25図）**

東部調査区の東から検出した椭円形の土壤で、長軸126cm、短軸94cm、深さ19～29cmを測る。埋土



第26図 土壌・掘立柱建物実測図 (1/50)

は灰茶色土で、遺物は出土していない。

**SK11（第25図）**

SK10に隣接した楕円形の土壤で、長軸180cm、短軸86cm、深さ32cmを測る。灰茶色土の堆積土で、土師器、染付をわずかに出土する。

**SK13（第25図）**

SD08、SK11に切られた隅丸方形の土壤で、長軸264cm、短軸80cm、深さ10~14cmを測る。埋土は灰茶色土を呈し、出土遺物は認めない。

**SK16（第26図）**

東部調査区の東から検出した楕円形の土壤で、長軸168cm、短軸106cm、深さ15~52cmを測る。埋土は黒色土であった。土師器を多数出土した他に、瓦器、黒色土器、白磁などの細片も見られる。

**SK21（第25図）**

楕円形の土壤である。長軸90cm、短軸84cm、深さ5cmを測り、土師器をわずかに認める。

**SK22（第25図）**

SK21に隣接した楕円形の土壤で、長軸104cm、短軸84cm、深さ3~6cmを測り、土師器をわずかに認める。

**SK23（第25図）**

SK24を切り、隅丸方形を呈した土壤である。長軸84cm、短軸72cm、深さ6~8cmを測り、土師器片を出土した。埋土は灰茶色土であった。

**SK24（第25図）**

長軸154cm、短軸96cm、深さ12~28cmを測る楕円形を呈した土壤である。黒茶色土の堆積土で、遺物は弥生土器、須恵器、土師器を出土した。

**SK26（第26図）**

長軸264cm、短軸96cmを測る隅丸長方形の土壤で、底部は6cm掘込んだ後、更に3~10cm掘込んだ痕が検出され、深さは12~17cmを測る。埋土は灰茶色土で、土師器細片をわずかに認める。

**SK28（第25図）**

東部調査区のほぼ中央で確認した楕円形を呈する土壤で、長軸90cm、短軸60cm、深さ7~10cmを測る。埋土は灰茶色土で、遺物は土師器を出土する。

**SK35（第26図、図版13-①）**

楕円形を呈した土壤で、北半分のみ検出した。径220cm、深さ143cmを測り、上層は灰茶色土、下層は青灰色粘土の堆積が見られ、また、下層には貝殻も含んでいた。出土遺物は、須恵器、土師器の他に、陶器、青磁、白磁、染付などを多量に出土した。

**SK48（第25図）**

東部調査区の西端で検出し、長軸100cm、短軸48cm、深さ2~11cmを測る。出土遺物は、須恵器、土師器、陶器を認める。埋土は灰茶色土。

**SK53（第25図）**

中央部調査区の東でSD56を切るように検出した。調査区にかかる南部を掘削し、深さは24~73cmを測る。埋土は黒茶色土を呈し、遺物は少量の弥生土器、須恵器の他、土師器、瓦器、陶器、磁器を多量に認めた。また石製品では黒曜石、石鍋を出土する。

#### SK60（第26図）

西部調査区の東端で検出した土壤で径97cm、深さ14cmを測る。更に土壤の中央部で掘込みを確認し、径63cm、深さ9cmを測り、出土遺物はなかった。

#### SK65（第26図）

西部調査区の東で認めた円形状の土壤で、径は80cm、深さ18cmを測る。灰茶色土の埋土を呈し、出土遺物はなかった。

#### SK66（第26図）

西部調査区の東で認めた円形状の土壤である。径は84cm、深さ14~18cmを測り、SK65とほぼ同一規模である。灰茶色土の埋土を呈し、出土遺物はなかった。

#### SK67（第25図）

隅丸長方形の土壤で、長軸72cm、短軸38cm、深さ6~9cmを測る。灰茶色土の埋土を呈し、出土遺物は認めない。

#### SK73（第26図）

東部調査区の東端で検出し、長軸190cm、短軸84cm、深さ23~32cmを測る。黒褐色土の埋土からなり、弥生土器、土師器の遺物が出土した。遺構の底部はほぼフラットであった。

#### SK74（第25図）

東部調査区の東端で検出した土壤群の中のひとつで、長軸104cm、短軸50cm、深さ18cmを測る。灰褐色土で炭化物を多く含む堆積土で、土師器、陶磁器の遺物が出土した。遺構の底部はほぼフラットであった。

#### SK78（第26図）

SD55に隣接した隅丸方形を呈した土壤で、幅74cm、深さ8cmを測る。黒褐色土の埋土からなり、遺物は出土していない。遺構の底部はほぼフラットであった。

東部調査区の東端で検出し、径は74cm、深さ8cmを測る。黒褐色土の埋土からなり、弥生土器、土師器の遺物が出土した。遺構の底部はほぼフラットであった。

#### SK83（第26図）

西部調査区の西部で検出し、南部は調査区にかかる。幅は90cm、深さ10cmを測り、黒褐色土の埋土を呈する。遺構の底部はほぼフラットで明確な遺物は出土していない。

#### その他の遺構

#### SX50（第25図）

中央部調査区の東で検出したもので、深さは12~41cmを測る。黒茶色土に黄茶色土のブロックを多く含む堆積土で、遺物は土師器、陶器、青磁、白磁、染付の他に、加工痕を認める石製品を出土している。

#### SX61（第25図）

西部調査区の東で検出したもので、深さは10~15cmを測る。遺構南部の底部には窪みが見受けられるが、埋土の状況からは、少なくとも同一時期に埋没したものであった。出土遺物では弥生土器、土師器、陶磁器を認める。

## 2. 出土遺物

SD33 (第27図、図版15)

### 土師器

土鍋 (52) 口縁部の細片で、色調は灰褐色、胎土および焼成は良好である。内面は刷毛目、外面はナデで調整を施し、外面には煤が付着し、2次焼成を受けている。

SD37 (第27図、図版16)

### 青磁

碗 (53) 復原口径14.4cmを測り、青緑色の釉がかけられる。胎土は微砂粒を含み乳灰色を呈する。

SD49 (第27図、図版17)

### 染付

碗 (54) 復原口径9.8cm、底径3.8cm、器高5.5cmを測り、外面に花鳥文を描く。

SD55 (第28図、図版15・16・17)

### 土師器

土鉢 (55) 最大径1.1cm、穿孔径0.3cmを測る。色調は淡茶褐色で、焼成はやや不良である。

甕 (62) 口縁部に貼付突帯を施し、口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面はナデ調整を施す。復原口径は100cm±5cmで、微砂粒を多く含む淡茶褐色を呈する。

鍋 (63) 復原口径34.6cmを測る。微砂粒を多く含む淡茶褐色で、口縁部には把手と思われる鉤がある。鉤の上部には下斜め方向の穿孔を2つ有し、内面は横方向の刷毛目を施す。

### 瓦器

碗 (56・57) 56は内外面ともにミガキを施し、口縁端部はやや内湾する。胎土は精選され、胎土は良好。57は口縁端部の器壁が薄く、内外面にミガキが認められる。胎土、焼成は良好。

摺鉢 (58) 口縁部の細片で、内面に4本の摺目を施す。

### 陶器

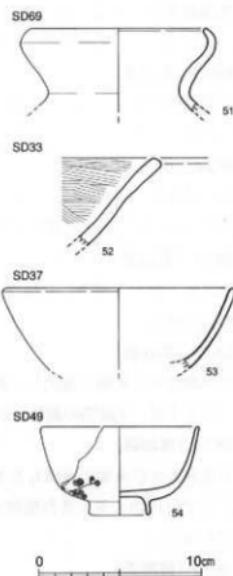
甕 (59) 底部の細片で、復原底径12.5cmを測り、内外面に茶褐色の釉を施す。

### 青磁

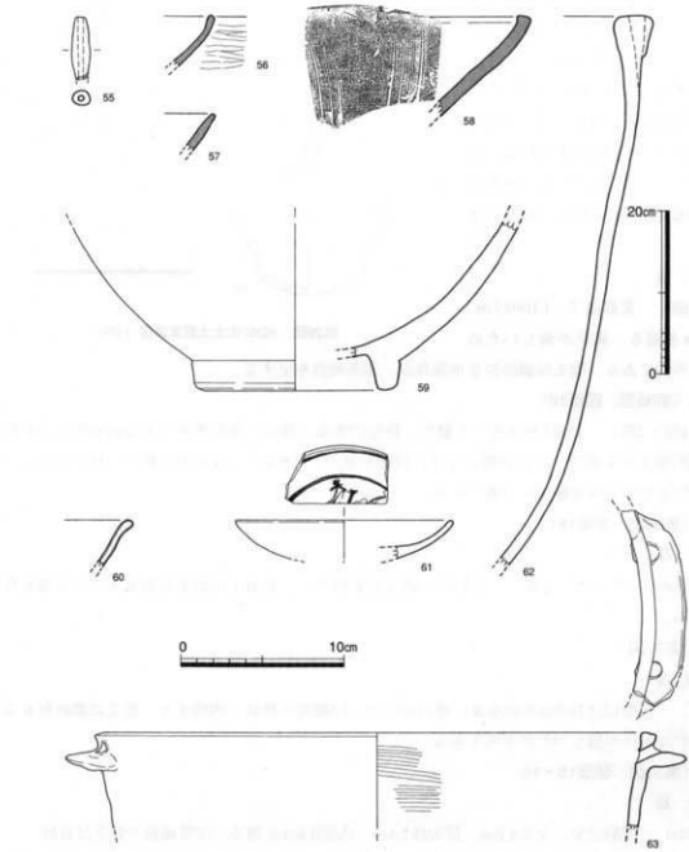
碗 (60) 口縁部細片で、口縁端部は緩やかに外反する。内外面に濃緑色の釉をかけ、貫入が見られる。

### 染付

皿 (61) 復原口径13.4cmを測り、内面体部および見込みに具須で文様を施す。また、内外面に淡青色の透明釉をかけるが、口縁端部は口禿げである。



第27図 溝出土土器実測図 (1/3)



第28図 SD55出土土器実測図 (1/3・1/6)

### SD57 (第29図、図版15・18)

#### 弥生土器

甕 (64-67) 64は口縁断面は「く」の字で、体部はタタキを施し、内外面は斜め方向の刷毛目調整である。胎土に微砂粒を含み、焼成は良好である。65は口縁部細片で、土器の表面は摩耗により調整不明である。66は口縁部細片で風化が激しいが、体部外面にタタキ痕が見られる。67は底部がレンズ状を呈する。風化が激しく調整は不明である。復原底径6.9cm。

#### 土師器

小壺 (68) 完形品で、口径9.7cm、器高5.3cmを測る。風化が激しいため調整等は不明である。胎土は細砂粒を少量含み、淡茶褐色を呈する。

#### 石製品 (第36図、図版18)

石鎌 (156・157) 156はサスカイト製で、抉りのある二等辺三角形形状を呈する両面加工の石鎌である。整形加工は丁寧で、平行剥離のように稜線が並ぶ。157はハリ質安山岩製で、抉りのある二等辺三角形形状を呈する両面加工の石鎌である。

#### SD59 (第36図、図版18)

#### 石製品

削器 (158) サスカイト製で、方形状の剥片を素材とし、表面上辺および裏面下辺に刃部を作り出している。

#### SD69 (第27図)

#### 弥生土器

壺 (51) 復原口径10.8cmを測る壺口縁の細片で、口縁部は袋状に内湾する。胎土は微砂粒を多く含み、調整は風化が激しいため不明である。

#### SK16 (第30図、図版15・16)

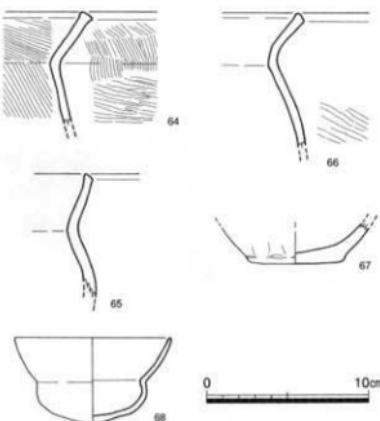
#### 土師器

土錐 (69) 完形品で、全長4.2cm、最大径1.4cm、内径0.4cmを測る。淡茶褐色で胎土は良好。

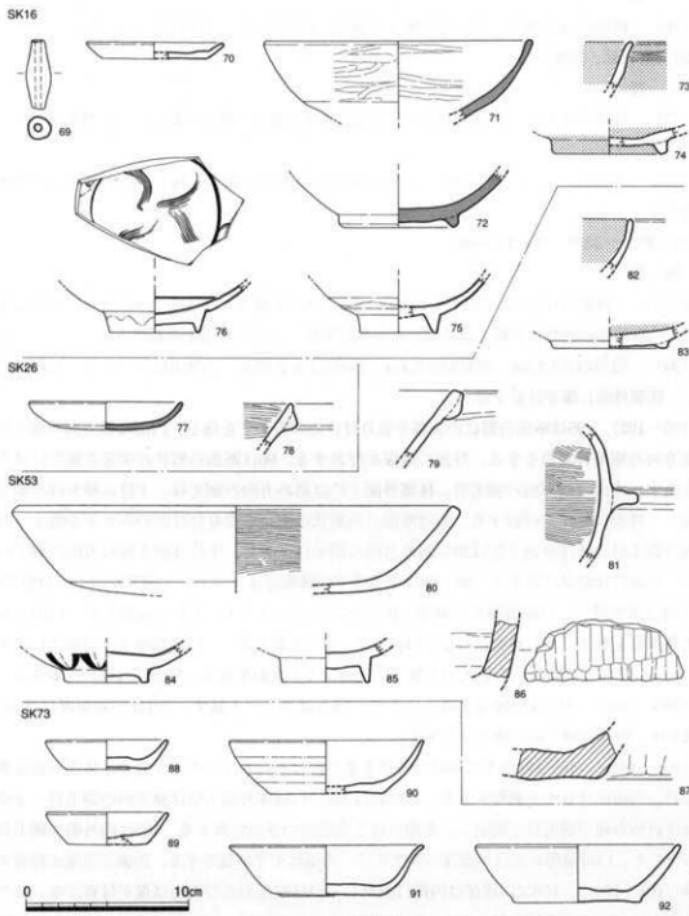
小皿 (70) 復原口径8.6cm、復原底径6.5cm、器高1.0cmを測り、内面および体部外面はヨコナデ、底部はヘラ切り。

#### 瓦器

椀 (71・72) 71は復原口径16.6cmを測り、内面および体部外面はヘラミガキを施す。また、体部から底部にかけての外面はヘラケヅリを施す。72は胎土が土師質に近いもので、復原底径7.4cmを測る。風化が激しく調整は不明である。



第29図 SD57出土土器実測図 (1/3)



第30図 土壌出土遺物実測図 (1/3)

### 黒色土器

椀 (73・74) 73は口縁部の細片で、胎土は精選され、色調は黒灰色を呈する。風化が激しく調整は不明。74は底部の細片で復原底径7.0cmを測る。内外面に横方向のミガキを施す。黒色土器B。

### 青 磁

碗 (75) 復原底径4.8cmを測り、高台部以外に透明な釉を薄くかける。

## 白 磁

碗 (76) 底径5.6cmを測り、見込みに柳目文を施す。高台部以外に透明釉をかける。

### SK26 (第30図、図版15)

## 瓦 器

皿 (77) 復原口径9.5cm、復原底径6.8cm、器高1.7cmを測る。風化が激しいため調整は不明であるが、底部外面はヘラ切りである。

鍋 (78) 玉縁状の貼付突帯を施す。内面は横方向の刷毛目調整を施し、外面には2次焼成の煤が付着する。

### SK35 (第31~33図、図版15~18)

## 土 師 器

小皿 (93) 復原口径6.4cm、復原底径3.6cm、器高1.8cmを測る。内外面はヨコナデ、底面は糸切りを施し、口縁端部に油煙の痕跡を認めるところから灯明皿としての使用を窺わせる。

皿 (94) 復原口径12.5cm、復原底径9.4cm、器高2.1cmを測る。内外面はヨコナデ、底面は糸切りを施し、底部外面に煤が付着する。

鍋 (95~102) 95は断面台形状の突帯を貼り付けたのちナデを施し、内面は横方向の刷毛目、外面は縦方向の刷毛目調整をする。外面には煤が付着する。96は断面台形状の突帯を貼り付けたのちナデを施す。内面は横方向の刷毛目、体部外面上位は斜め方向の刷毛目、下位は横方向の刷毛目調整を施し、外面には煤が付着する。97は断面三角形状の突帯を貼り付けたのちナデを施す。内面は横方向の刷毛目、体部外面上位は粗い斜め方向の刷毛目に対し、下位は密な斜め方向の刷毛目調整を施す。外面には煤が付着する。98・99は素口縁で口縁端部はヨコナデ、内外面はナデ調整を施す。100・101は素口縁で、口縁端部から体部上位にかけてはヨコナデ、下位では刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整を施す。共に外面には煤が付着する。102は素突帯で、口縁端部から体部上位にかけてはヨコナデ、下位では縦方向の刷毛目を施し、内面はナデ調製を施す。外面には煤が付着する。

鉢 (103・104) 103は口縁端部はヨコナデ、内外面はナデを施す。104は口縁端部はヨコナデ、外面はナデ、内面は横方向の刷毛目を施す。

甕 (105~107) 105は断面が台形状の突帯を貼り付けたのちヨコナデを施し、体部外面は横方向の刷毛目、内面はヨコナデ調整をする。106は素口縁で口縁部外面上位は横方向の刷毛目、下位および内面は斜め方向の刷毛目で調整し、表面には2次焼成の煤が付着する。107は内外面に刷毛目調整を施したのち、口縁端部および外面はヘラケズリ、内面はナデ調製をする。内面には煤が付着する。

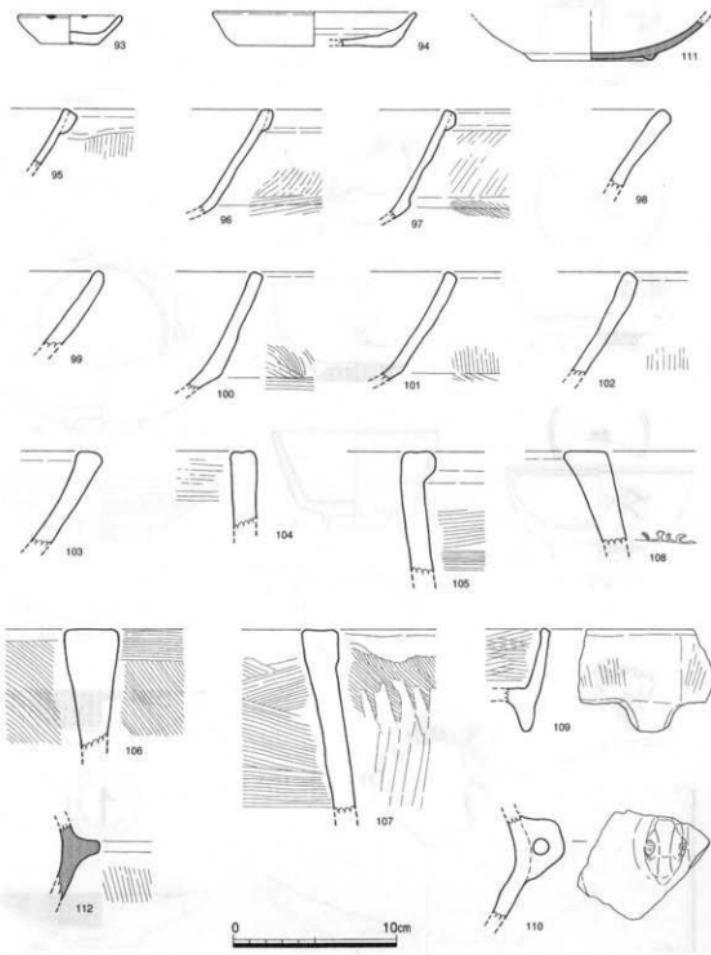
火鉢 (108・109) 108は口縁部は内面に張出し、口縁端部および内面は煤が付着する。また、外面にはスタンプによる文様が見られる。109は隅丸方形の火鉢で、口縁部は内面に突出し、底部に脚部を貼り付ける。内面は刷毛目、外面は刷毛目のちナデ、脚部はナデ調整を施す。

茶釜 (110) 内面は横方向の刷毛目、外面はナデ調整である。鍔には9mm大の穿孔を施す。

## 瓦 器

椀 (111) 復原底径7.4cmを測る。風化が激しいため調整は不明である。

鍋 (112) 調整について、鍔上位はヘラケズリ、下位はナデ、体部外面は刷毛目、内面はヨコナデを施す。



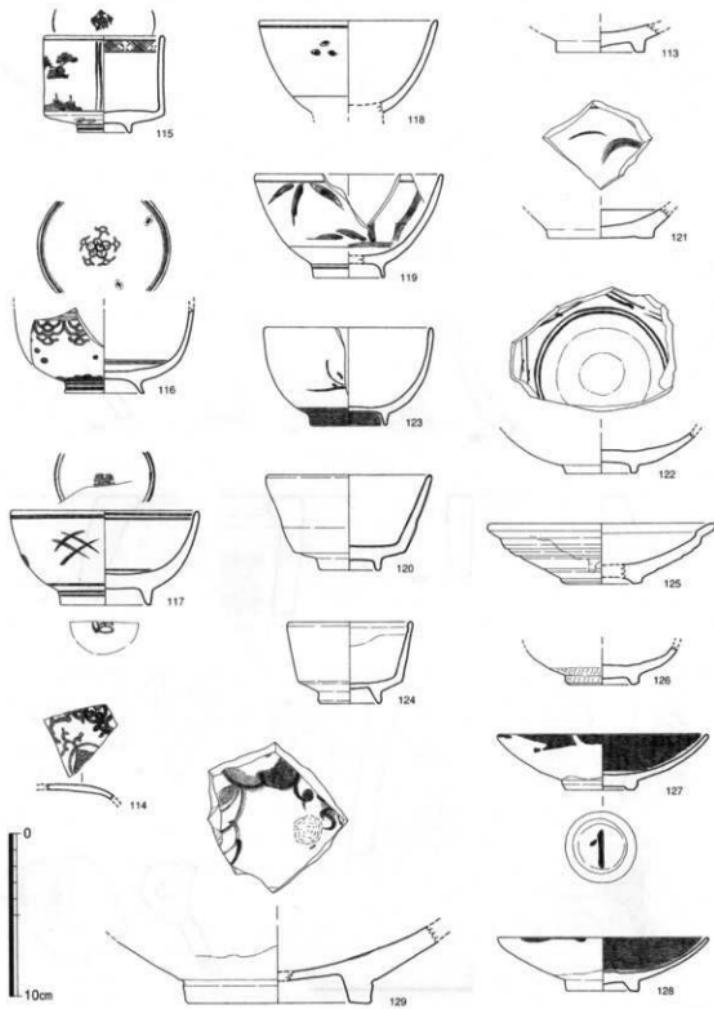
第31図 SK35出土土器実測図① (1/3)

### 青 磁

碗 (113) 復原底径5.4cmを測る。内面に飴色の釉を薄くかけ、貫入が見られる。

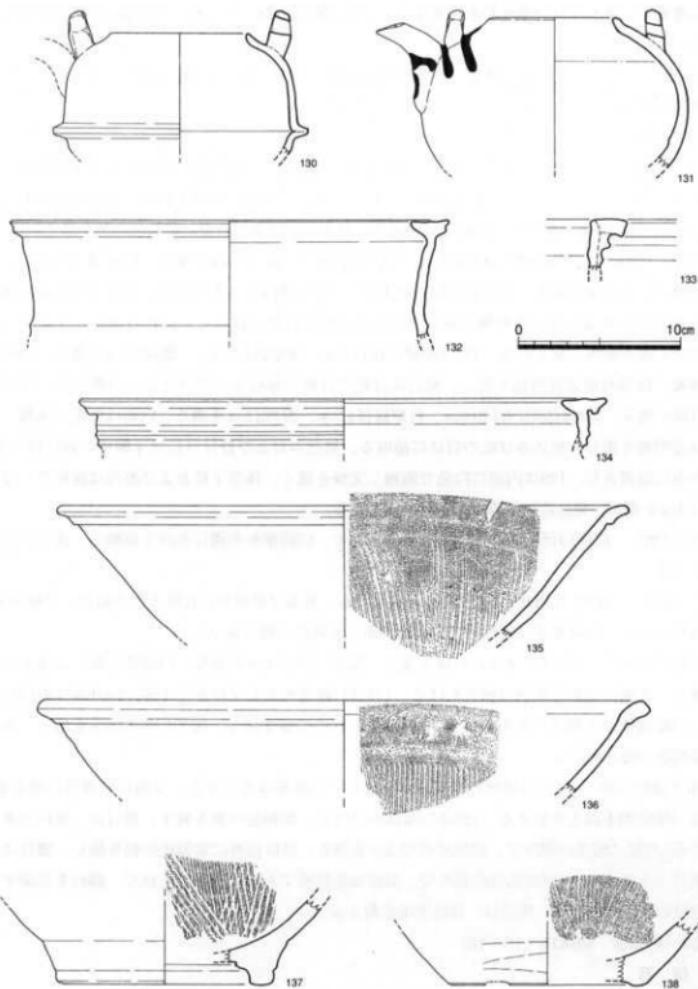
### 染 付

蓋 (114) 体部外面に呉須で唐草文様を描き焼いたのち緑色で唐草文様、赤色でスタンプを施す。



第32図 SK35出土土器実測図② (1/3)

碗 (115~121) 115は古伊万里の筒型碗で、見込みには五弁花文を施す。体部外面には舟須で松葉文を描き、口径7.5cm、底径3.3cm、器高6.0cmを測る。116は古伊万里のやや厚手の碗で、体部は丸みを帯びている。高台はハの字に開き、見込みにはやや崩れた五弁花文を施し、針支えが2箇所見られる。外面には輪宝文を描き、底径は5.0cmを測る。117は古伊万里のくらわんか碗である。厚手で、



第33図 SK35出土土器実測図③ (1/3)

見込みにはコンニャク印版による五弁花文を施し、底部外面には銘が見られる。復原口径11.6cm、復原底径5.5cm、器高5.9cmを測る。118は復原口径11.0cmを測り、体部外面には呂須で葉文を描く。地色はやや白い。119は復原口径11.6cm、復原底径4.4cm、器高6.4cmを測る。体部外面には呂須で笹葉文を描く。120は復原口径10.2cm、復原底径3.8cm、器高5.9cmを測り、表面に淡青緑色の釉を薄くかける。

豊付は露胎で、重ね焼時の微砂粒が付着する。121は復原底径6.6cmを測り、内面に緑褐色の釉を薄くかける。

皿（122） 復原底径4.4cmを測る。淡青色の釉を薄くかけ、見込みは蛇の目状に搔取る。豊付けは重ね焼時の微砂粒が付着する。

### 陶 器

碗（123・124） 123は復原口径10.4cm、底径4.9cm、器高6.0cmを測る。内面および体部外面は胎色の釉を薄くかけ、口縁端部および高台の豊付け以外に暗黒茶褐色の顔料を施す。124は復原口径7.7cm、底径3.9cm、器高5.0cmを測る。筒型碗で、口縁部内外面および体部外面に紫褐色の釉を薄くかける。

皿（125～129） 125は復原口径14.0cm、復原底径5.0cm、器高3.8cmを測る。口縁部はN字状に外反し、内面および口縁部外面に乳茶色の釉を施すが、一部に釉ダレが見られる。126は高台径4.5cmを測る。内面および体部外面に透明釉を施し、見込みは蛇の目状に搔取る。高台外面はヘラケズリを施し、ケズリ痕が鮮明に見られる。127は復原口径13.0cm、復原底径4.5cm、器高3.3cmを測る。内面は藍色の施釉、体部外面は透明釉を施し、見込みは蛇の目状に搔取る。見込みおよび豊付けには3箇所の砂目跡が残る。128は復原口径13.0cm、復原底径4.3cm、器高3.5cmを測る。内面は藍色の施釉、体部外面は透明釉を施し、見込みは蛇の目状に搔取る。見込みおよび豊付けには4箇所の砂目跡が残る。底部外面に墨書きあり。129は内面に白色で施釉し文様を描く。体部下位および高台は露胎で、復原底径は11.4cmを測る。見込みに2箇所の目跡が見られる。

茶釜（130） 復原口径8.4cm、最大径15.7cmを測る。口縁部から鈍にかけて施釉し、鈍から下位は無釉である。

水注（131） 復原口径8.0cm、最大径16.4cmを測る。外面は黄褐色の化粧土に茶褐色で文様を施し、透明釉をかける。口縁端部は露胎で、口縁部内面に茶褐色の釉を施す。

甕（132～134） 132はT字状の口縁を呈し、復原口径27.0cmを測る。口縁部外面には幾重の波状文を施し、表面には黄茶褐色の釉をかける。133は口縁部が逆L字状を呈する。内外面は黄白色の施釉で、口縁端部は茶褐色の釉をかける。134はT字状の口縁を呈し、復原口径32.6cmを測る。表面には黄茶褐色の釉をかける。

摺鉢（135～138） 135は復原口径35.2cmを測り、口縁部は外反する。全面に茶褐色の釉を施し、櫛目は一単位20本以上を数える。136は口縁部が外反し、紫褐色の釉を施す。櫛目は一単位25本以上を数える。137は底部の細片で、復原底径13.3cmを測る。豊付以外に紫褐色の釉を施し、櫛目は一単位13本以上を数える。138は底部の細片で、表面は無施釉である。底部は上底で、高台を意識するよう豊付の一部をえぐる。櫛目は一単位8本を数える。

### 土 師 器

鍋（79・80） 79は口縁部の細片で、玉縁状の突帯を貼付けたのちナデ調整する。外面には煤が付着する。80は復原口径27.6cmを測る。素口縁で、内面は横方向の刷毛目、外面はナデ調整を施す。外面には煤が薄く付着する。

茶釜（81） 内面は横方向の刷毛目、肩部はナデ、鈍から下位はヨコナデ調整を施す。鈍に若干の煤が付着する。

### 黒色土器A

椀（82・83） 82は口縁部の細片で、風化が激しいために調整は不明である。83は底部の細片で復原底径7.2cmを測る。内面に横方向のミガキを施す。

### 青 磁

碗（84・85） 84は龍泉系の青磁で底部の細片である。底径5.2cmを測り、外面に鎌連弁を施し、淡青色の釉をかける。85は同安系の青磁で復原底径は5.4cmを測る。内面に緑褐色の釉を施す。

### 石 製 品

石鍋（86・87） 86・87は滑石製である。109は底部の細片で内面に斜め方向の道具痕が残る。110は体部の細片で外面に道具痕が残る。

### SK73（第30図、図版15）

### 土 師 器

小皿（88・89） 88は復原口径7.6cm、復原底径5.2cm、器高18cmを測る。底部外面は糸切りで、内外面はヨコナデ調整を施す。細砂粒、角閃石を含み、淡赤褐色を呈する。89は復原口径7.6cm、復原底径5.0cm、器高20cmを測る。底部外面は糸切りで、内外面はヨコナデ調整を施す。

坏（90～92） 90は復原口径11.9cm、復原底径7.0cm、器高33cmを測る。底部外面は糸切りで、内外面はヨコナデ調整を施す。口縁部はやや内湾する。91の口縁部はやや外反し、復原口径12.7cm、復原底径6.6cm、器高3.1cmを測る。底部外面は糸切りで、内外面はヨコナデ調整を施す。92は復元口径12.7cm、復原底径7.9cm、器高36cmを測る。後円部はほぼ直に伸び、底部外面は糸切りで、内外面はヨコナデ調整を施す。

### SX50（第34図、図版15～17）

### 土 師 器

甕（139） 口縁部細片で、口縁部内外面および体部内面はヨコナデ、体部外面は縦方向の刷毛目の調整を施す。金雲母、角閃石を僅かに含み、茶褐色を呈する。

### 黒色土器

椀（140・141） 140は口縁部細片で内面にミガキを施し、胎土は精選された濃灰色を呈する。黒色土器A。141は底部の細片で内外面にミガキを施す。胎土は精選された濃灰色を呈する。黒色土器B。

### 瓦 器

椀（142・143） 142は口縁部のみで風化が激しく調整不明。外面に重ね焼の痕跡あり。143は表面の摩耗が激しく調整不明であるが、体部外面に若干のヘラケズリが見られる。また、内面に2次焼成と思われる煤が付着する。復原口径15.5cm。

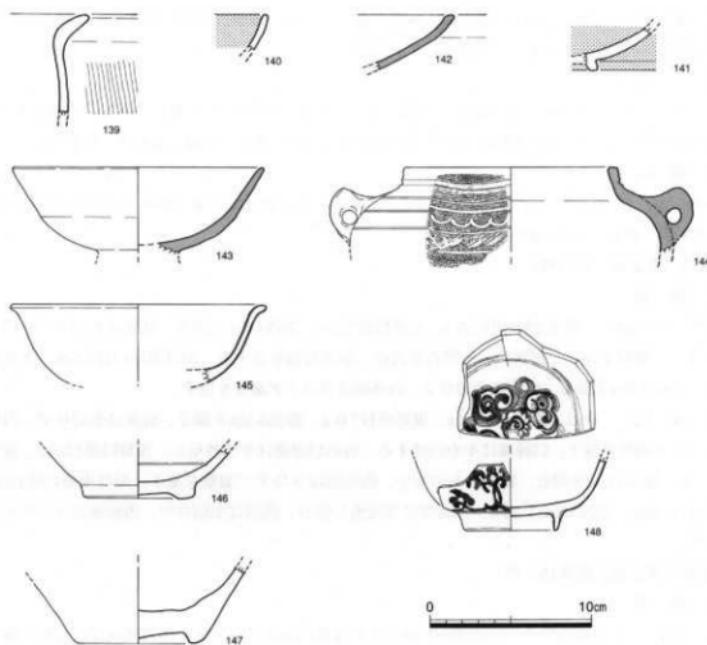
茶釜（144） 肩部外面に沈線および押型文を施し、復原口径は13.2cmを測る。把手に8mm大の穿孔を施し、鼠がかじったと思われる痕も見られる。

### 青 磁

碗（145） 復原口径15.8cmを測る。口縁部はやや外反し、青緑色の釉を薄くかける。

### 白 磁

碗（146） 底部外面は露胎で、内面に薄く透明釉をかける。高台径は9.8cmを測る。



第34図 SX50出土土器実測図 (1/3)

#### 灰軸陶器

壺 (147) 底部のみで、底径7.8cmを測る。表面に灰軸がかかり、胎土は茶褐色を呈する。

#### 染付

碗 (148) 高台径5.8cmを測り、見込みおよび体部外面に舟須で唐草文様を施す。透明釉をかけているが、高台疊付は露胎である。断面の一部に漆痕が残り、修復したものと思われる。

#### SX61 (第35図、図版18)

#### 土師器

高坏 (150) 脚部のみで底径8.2cm、脚高3.8cmを測り、微砂粒を少量含み淡赤褐色を呈する。風化が激しいため調整については不明である。

#### 石製品 (第36図、図版18)

石鎌 (155・159) 157はサヌカイト製で、挟りのある二等辺三角形状を呈する両面加工の石鎌である。刀部は丁寧に作り出し、尖端を欠損する。161は黒曜石製で未製品の石鎌である。尖端と両脚端を欠損する。

SP34 (第35図、図版15)

### 土 師 器

土鍋 (149) 口縁部細片で口縁部に玉縁状の貼付突帯を施す。調整については内面および体部外面はナデで、そのほかはヨコナデを施し、外面には2次焼成を受けた煤が付着する。

表土 (第35図、図版15・17)

### 弥 生 土 器

甕 (151) 復原口径18.0cmを測り、細砂粒を多く含む暗茶褐色を呈する。調整は口縁部内外面はヨコナデで、体部外面は刷毛目、体部内面は斜め方向のヘラケズリを施す。

### 瓦 質 土 器

摺鉢 (152) 復原底径13.8cmを測る。色調は淡灰色で胎土は微砂粒を少量含む。体部内面に一単位4本の櫛目を施した後、ヨコナデ調整をする。体部外面は刷毛目調整の後すり消し、底部はナデ調整を施す。

### 土 師 器

摺鉢 (153) 復原底径13.0cmを測る。内面はヨコナデの後、一単位4本の櫛目を施し、外面はナデ調整を施す。色調は灰褐色で、多くの細砂粒を含む。

### 陶 器

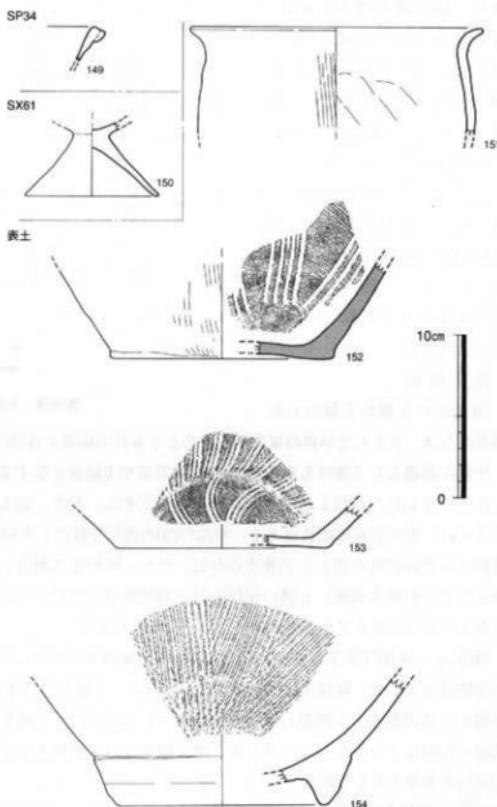
摺鉢 (154) 復原底径13.0cmを測る。一単位13本以上の櫛目を認め、全面に紫茶褐色の釉をかける。

## 3. 小 結

主な遺構について年代別に記述し、まとめとする。

### 弥 生 時 代

調査区の西側で検出したやや蛇行しながら東西方向に延びる溝SD57・SD59・SD69は、弥生時代後



第35図 SX61・SP34・表土出土土器実測図 (1/3)

期の一連の溝と考えられる。SD69のすぐ南から検出されたSB70は、出土遺物がなく年代決定には至っていないが、堆積した土壤が類似していたことより同時期に比定する。

当遺跡の南約500m付近では、弥生時代の散布地として長崎遺跡（現在は消滅）が確認されており、周辺一帯に弥生の集落が繁栄されていたものと思われる。

#### 歴史時代

調査区の東側から検出した遺構からは、主として中世の後半期を中心とする日用雑器や各種の陶磁器類が出土した。

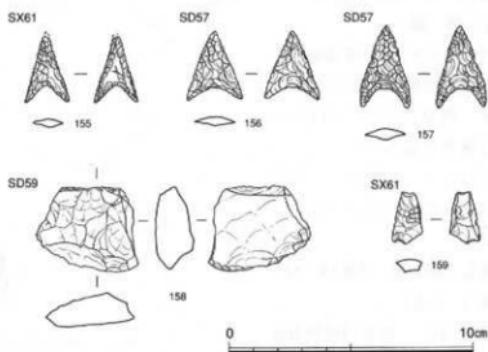
中世の遺構として挙げられるSX50は土師器釜や玉縁状を呈する土鍋の他に、龍泉窯系青磁や白磁が出土しており、埋没した年代は14C代を比定する。ただ、混入品と思われる明代の染付を認めていたため、更に下る可能性はある。更にSX50の西側で検出したSD55は南北方向に延びる溝で、出土遺物からは14C代の溝として考えられる。ただ、同年度に調査した「若菜田中前遺跡」のSD1（調査所見では近世と判断）と溝の規模並びに堆積状況が類似していることもあって、一連の流路として捉えられることもでき、更に時期が下る可能性もある。

SK35は、調査の都合により土壤の北半分しか掘削することができなかつてもかかわらず、多量の遺物が出土した。堆積土は大別して2層に別れ、上層からは主に近世の染付（古伊万里）を認め、下層からは須恵器・土師器の皿（糸切り）、壺（糸切り）、玉縁状を呈する土鍋・瓦器輪・龍泉窯系青磁・白磁などが出土しているため、埋没時期は14C以降を比定し、遅くとも19C代までには埋没していたものと考えられる。

なお、調査区の東端部は現在の地目が山林となっており、付近からは近世から現代にかけての墓が数基確認されているため、近世以降は墓地として使用されていたものと思われる。

#### （参考文献）

1. 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心にして—」  
『九州歴史資料館研究論集4』 1978年
2. 森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982年
3. 鈴木道之助「図録 石器入門辞典 繩文」「柏書房」 1991年
4. 大橋康二「古伊万里の文様—初期肥前磁器を中心に—」『理工学社』 1994年
5. 西田宏子・大橋康二「別冊太陽No.63 古伊万里」「平凡社」 1988年



第36図 石器実測図（1/2）

図 版



① 若菜立薪遺跡西調査区全景（西から）



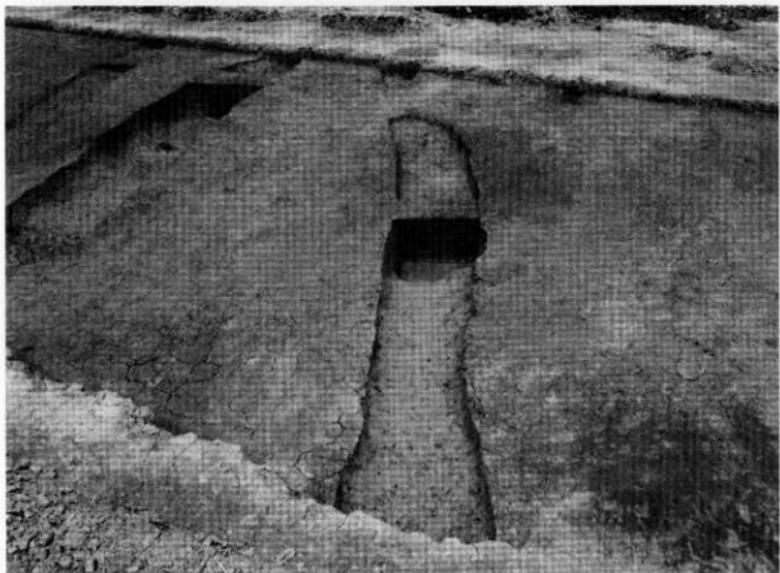
② 若菜立薪遺跡東調査区（西から）

図版 2



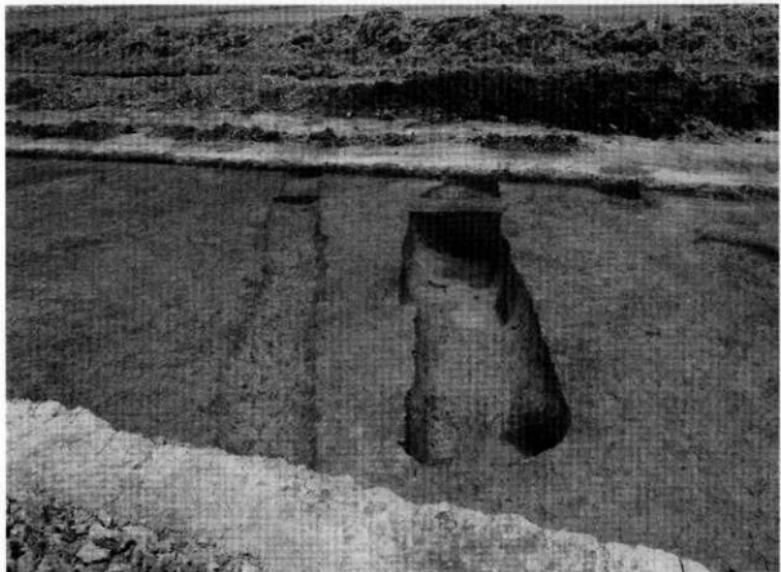
① 若菜立薪遺跡SB20（北から）

（古墳）若菜立薪遺跡SB20



② 若菜立薪遺跡SD05（南から）

（古墳）若菜立薪遺跡SD05



① 若菜立薪遺跡SD10・SD15（南から）

〔参考圖〕 沢木良一、立川洋一、佐藤敏郎著「立薪跡」



② 若菜立薪遺跡SD25・SK11・SK47（南から）

〔参考圖〕 沢木良一、立川洋一、佐藤敏郎著「立薪跡」

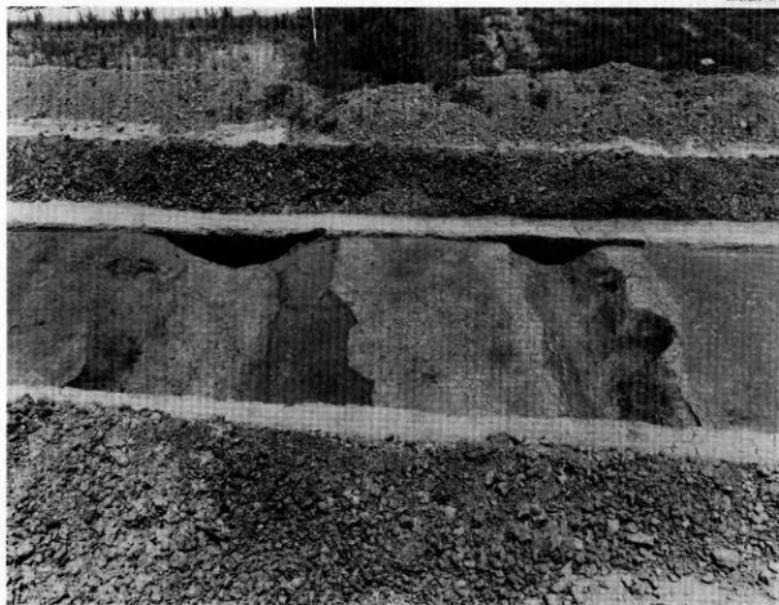
図版 4



① 若菜立薪遺跡SD35・SK12・SK13（南から）



② 若菜立薪遺跡SD40・SK28・SK36・SK42・ピット群（南から）

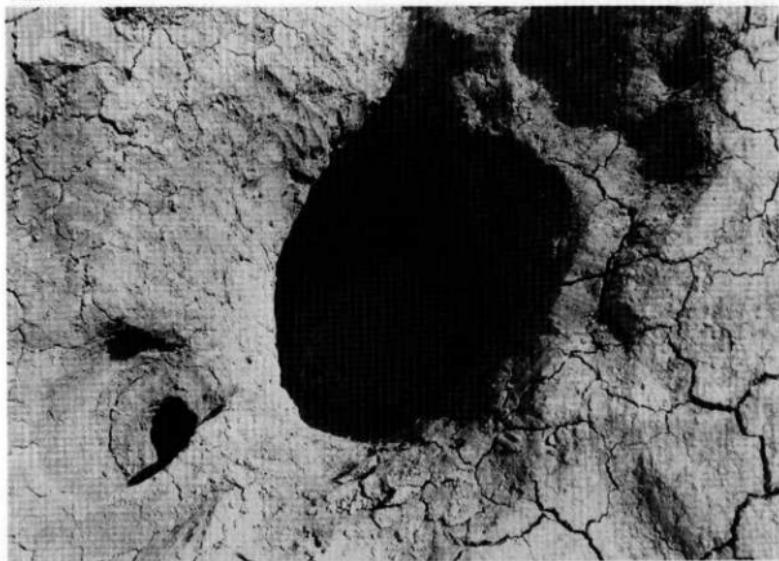


① 若菜立薪遺跡SD45・SD50・SK52（南から）



② 若菜立薪遺跡SD49・SD51（東から）

図版 6



① 若菜立萩遺跡SE55（北から）



② 若菜立萩遺跡ピット群（東から）

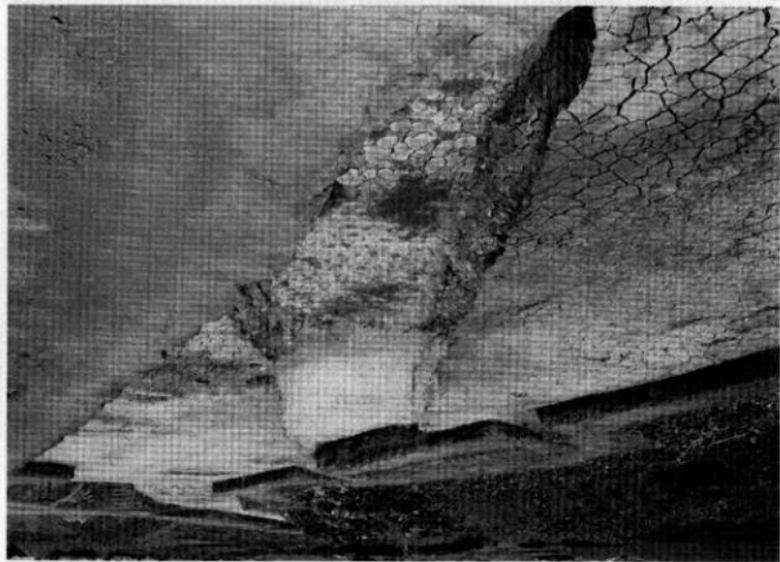


① 若菜田中前遺跡西側調査区全景（東から）

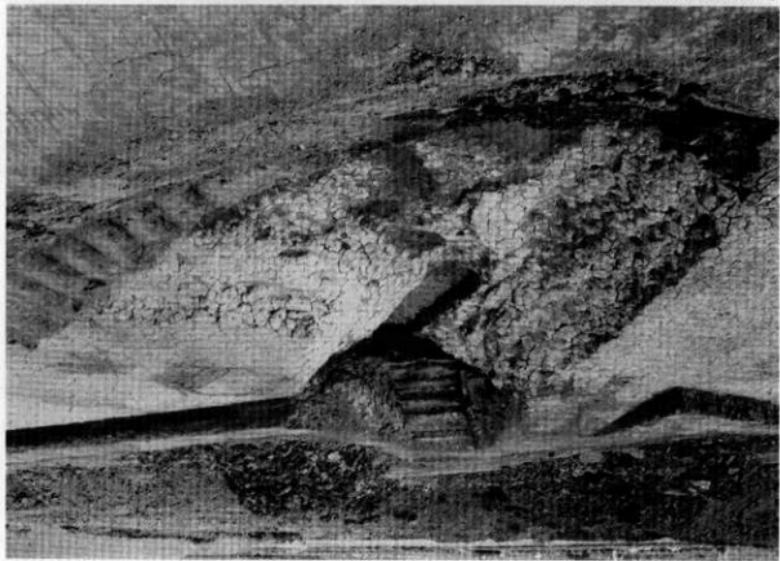


② 若菜田中前遺跡南側調査区全景（北から）

② 考叢田中前進跡 SDA (南方位)



① 考叢田中前進跡 SDS5 (北方位)





① 若菜田中前遺跡SK2・SK3（南から）

〔参考写真：眞野伊空〕 真野2020年夏米村知能人所蔵



② 若菜田中前遺跡調査風景

〔参考写真：眞野伊空〕 真野2020年夏米村知能人所蔵

図版 10



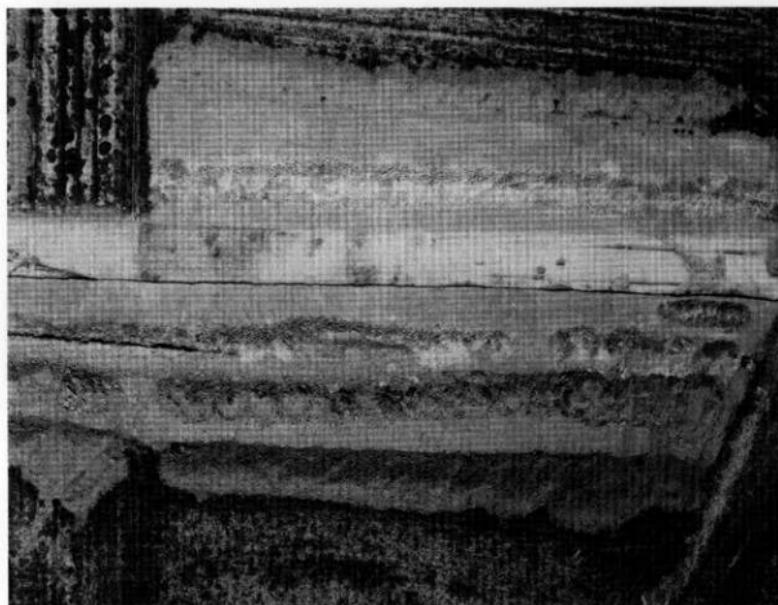
① 若菜湖ノ江遺跡東側調査区遠景（空中写真、西から）



② 若菜湖ノ江遺跡東側調査区（空中写真、真上から）

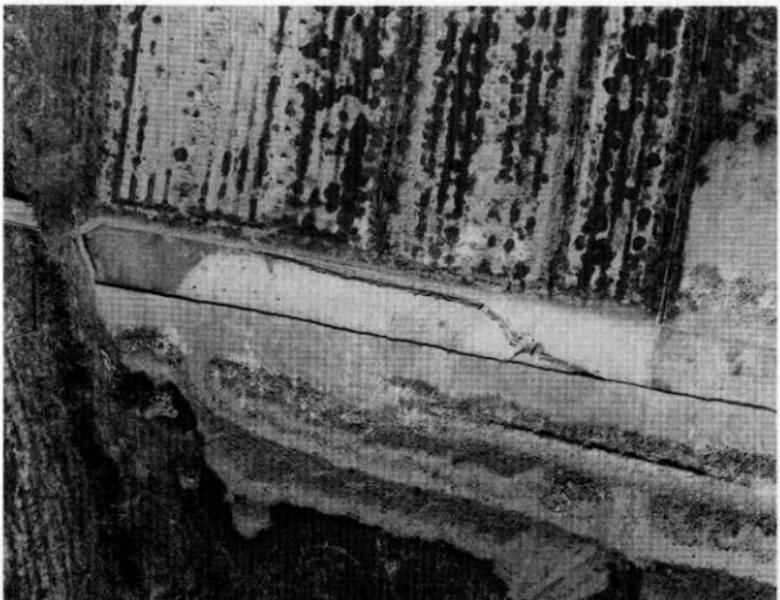


① 若菜湖ノ江遺跡中央調査区全景（空中写真、真上から）

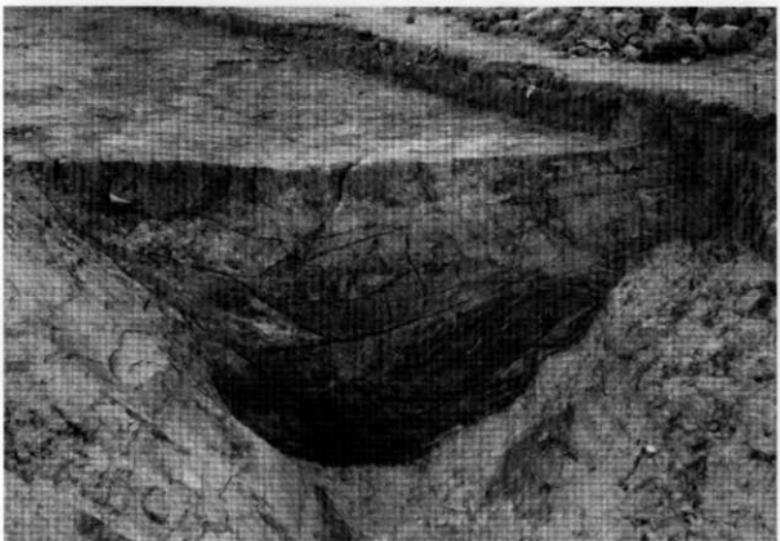


② 若菜湖ノ江遺跡西側調査区（空中写真、真上から）

図版 12



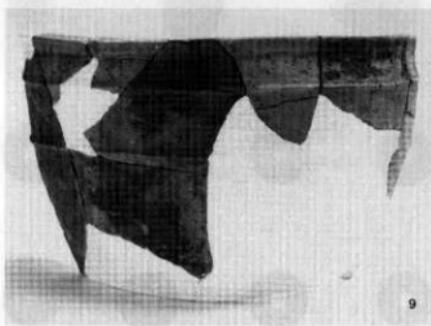
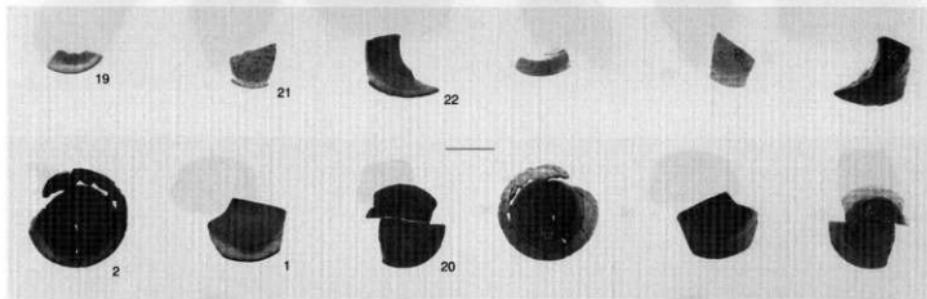
①若菜湖ノ江遺跡西側調査区（空中写真、真上から）



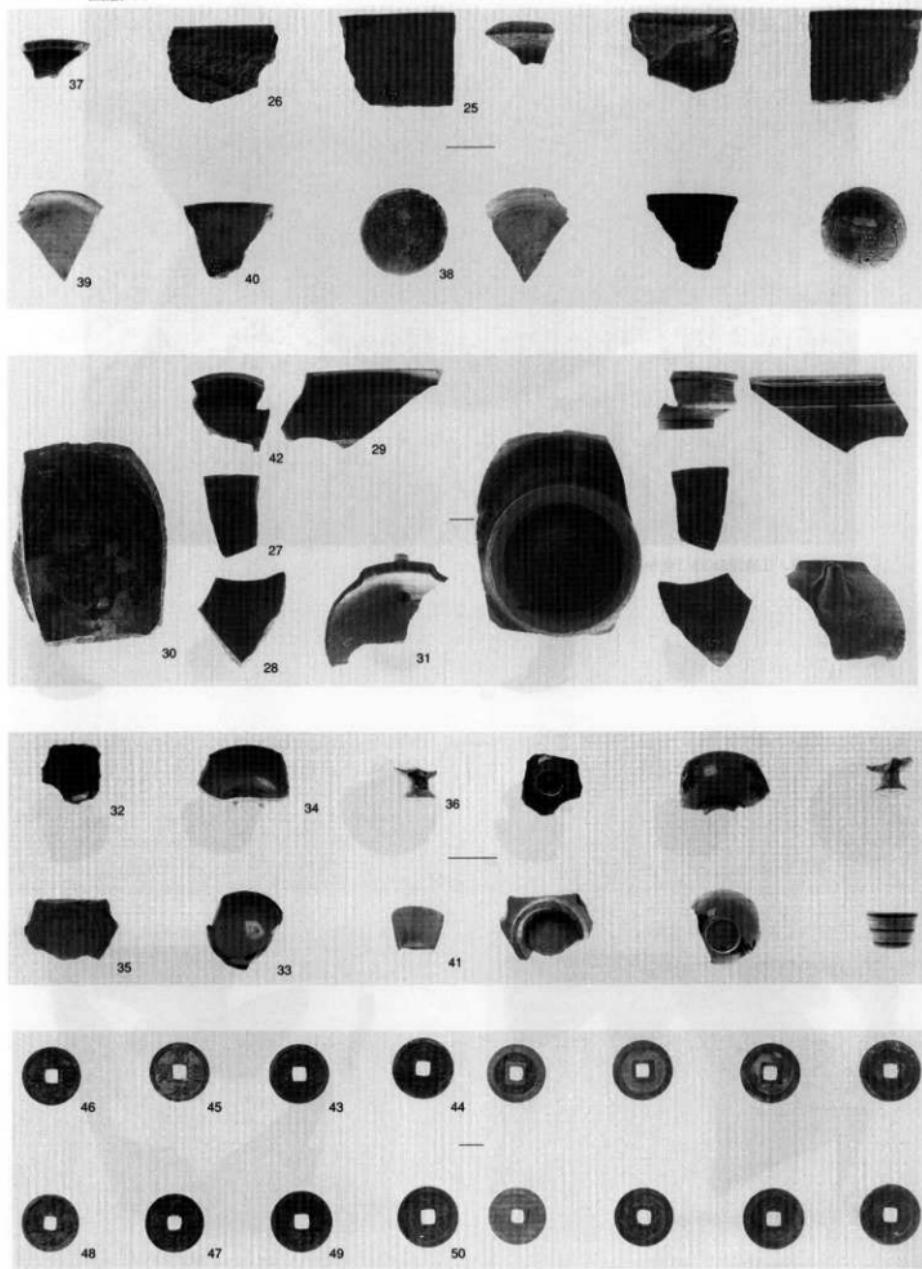
②若菜湖ノ江遺跡SD55土層断面（南から）



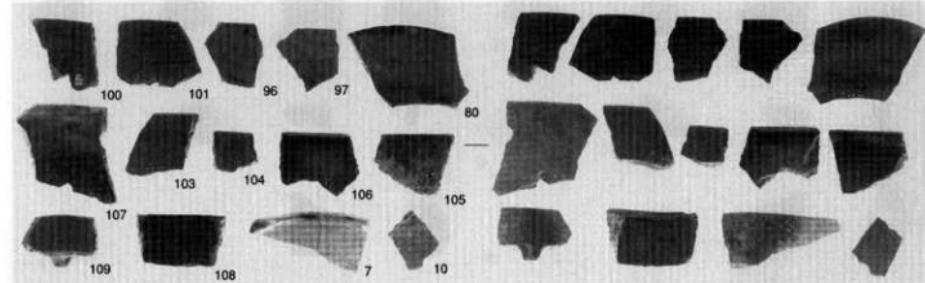
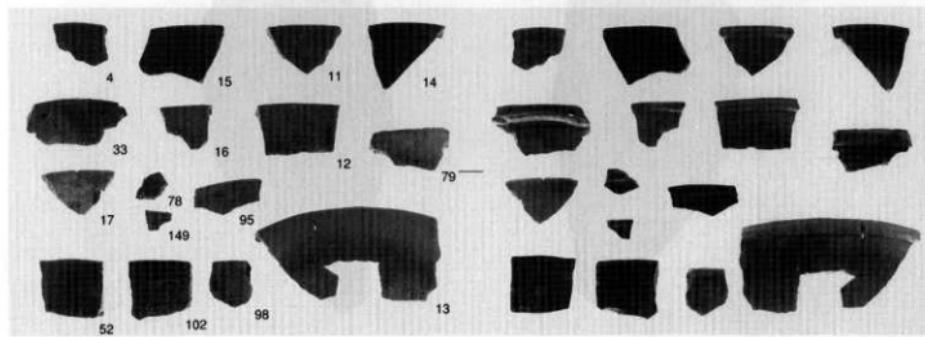
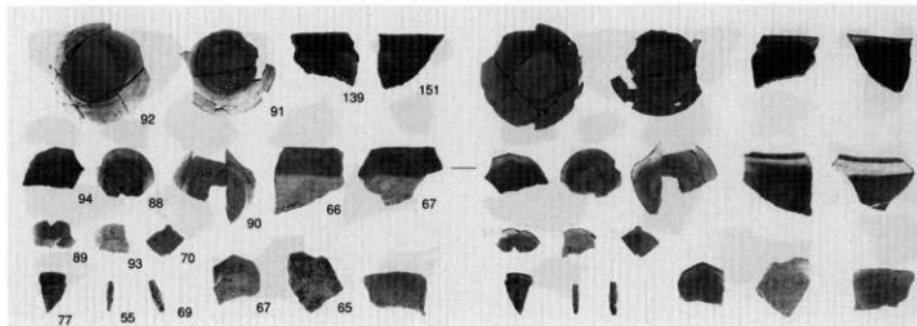
① 若菜湖ノ江遺跡SK35（北から）



図版 14



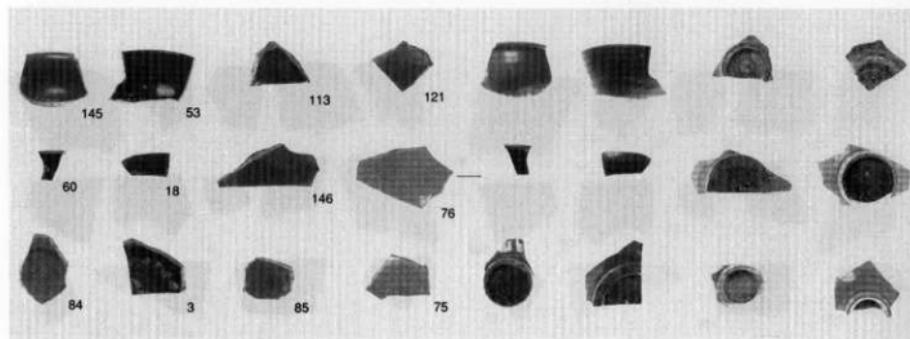
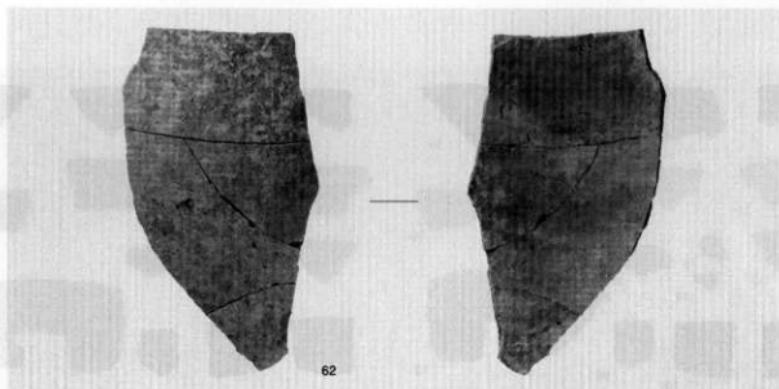
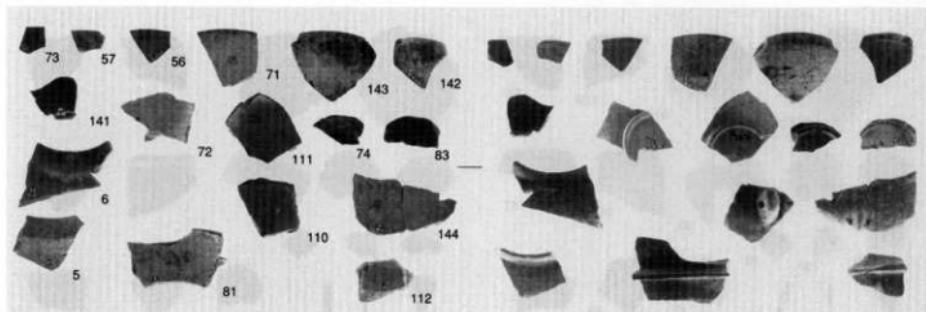
北部第二地区遺跡群出土遺物



北部第二地区遺跡群出土遺物

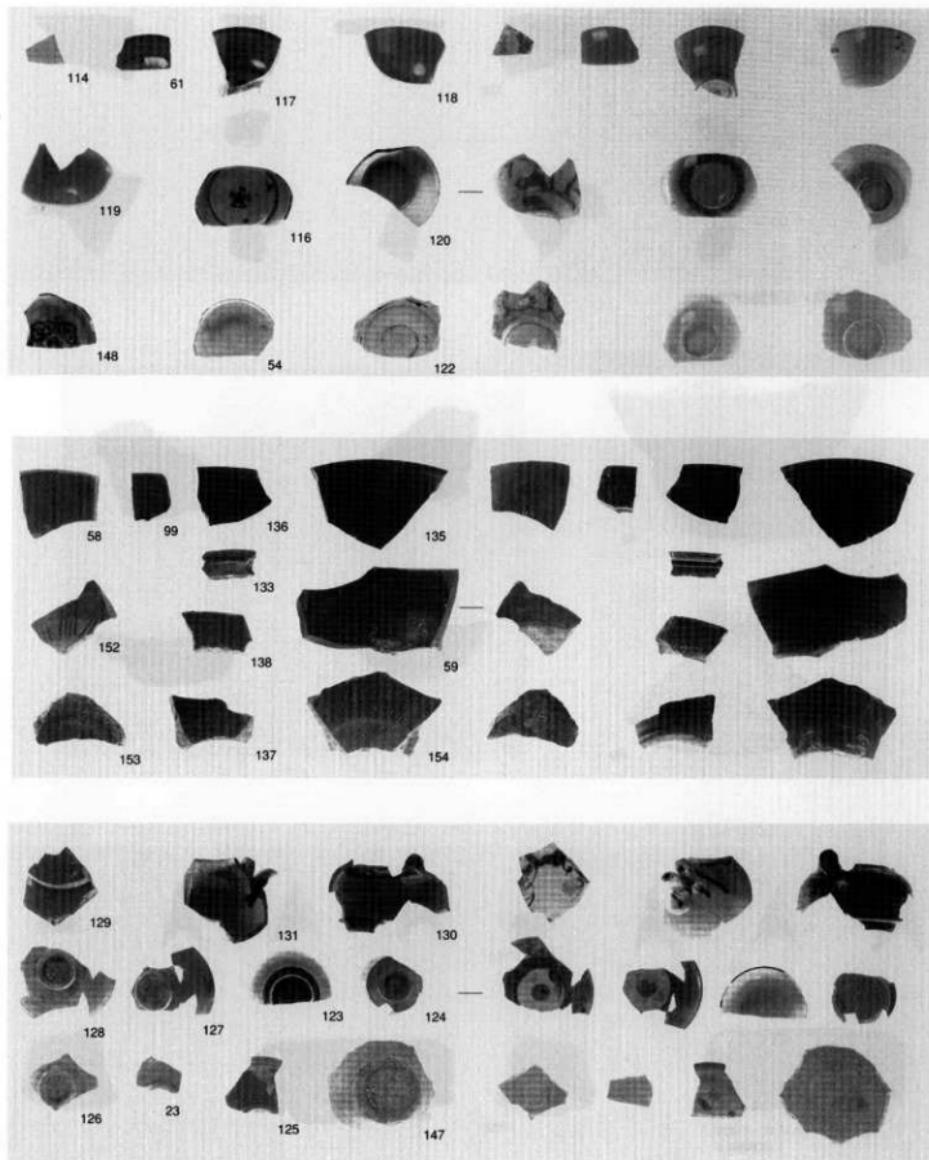
新石器時代後期二重窓式

図版 16



北部第二地区遺跡群出土遺物

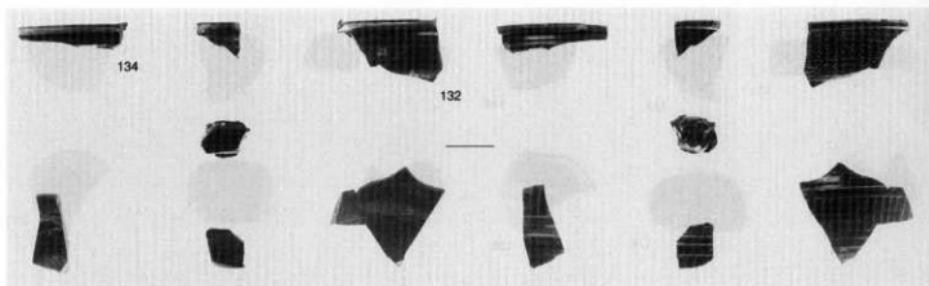
新石器時代中期後半



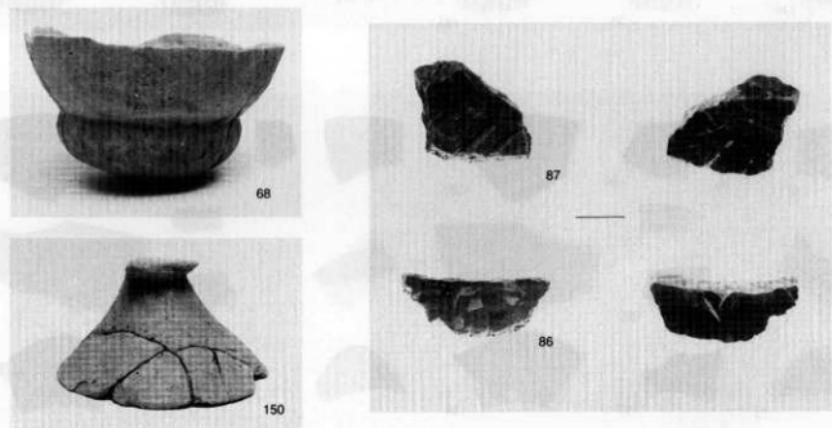
北部第二地区遺跡群出土遺物

新石器時代晚期至二千紀初

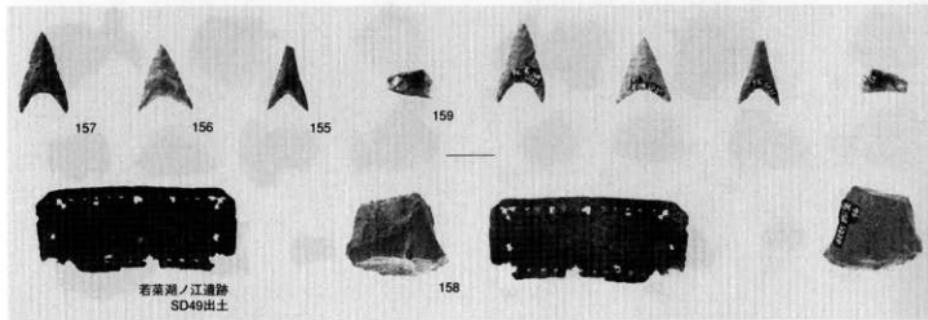
図版 18



若菜湖ノ江遺跡SK35出土



150



若菜湖ノ江遺跡  
SD49出土

北部第二地区遺跡群出土遺物

新石器時代後期 石器二

筑後北部第二地区遺跡群

筑後市文化財調査報告書 第16集

平成7年3月31日

発行 築後市教育委員会  
筑後市大字山ノ井898

印刷 アオヤギ株式会社  
福岡市中央区渡辺通二丁目9-31